

甲南英文学

NO.2 春 1987

甲南英文学会

編集委員 (五十音順) *印は編集委員長)

青山義孝 有村兼彬 谷真嗣 谷本泰三 *榎矢好弘 松村昌家

目 次

<i>Middlemarch</i> における Dorothea の選択	浅野 英里子 1
<i>David Copperfield</i> 一 過去への回帰	船橋 麻由美 13
The Denial of Absolute Truth	
Henry James's <i>The Turn of the Screw</i>	Seich Nakai 28
Elsewhere Condition について	岩永美津 51
Markedness and Double Object Constructions	Minoru Fukuda 67

Middlemarch における Dorothea の選択

浅野 万里子

SYNOPSIS

In *Middlemarch*, Dorothea must make some difficult decisions. She is young, ardent and idealistic, so she creates the illusion of an ideal marriage. The first decision for her is marriage to Casaubon. A wedding journey to Rome, however, makes her doubt the illusion. She doubts even the value of Casaubon's research, his life-work. Their married life full of irritations demanding great patience leads to her second difficulty.

Then she has to decide either obedience or disobedience to her husband after his death. She struggles to determine which to choose, and cannot come to make a resolution.

After Casaubon's death, the codicil to his will makes her rebel against him. Though mutual understanding gives Dorothea and Ladislaw confidence, she misunderstands faithful Ladislaw and is disappointed. In her agony she realizes her real emotion, her love to Ladislaw. This realization leads her to develop sympathy for others, which George Eliot considers is very important in our life, in our society.

Middlemarch (1871~72) には、*A Study of Provincial Life* という副題がつけられている通り、一地方のさまざまな階級や職業の人びとの複雑な関わりが、人間性に対する作者の深い洞察と共感をもって描かれている。作品中には、Dorothea と Casaubon のプロット、Lydgate と Rosamond のもの、Garth 家に関わるもの、Bulstrode に関わるものといった幾つものプ

ロットがあるが、中心となるのは先の二つであろう。Eliot はまず医者を中心人物とする作品を書き始めたが、それに後で着手した *Miss Brooke* を加えて一つの作品、すなわち *Middlemarch* を完成させた。この成り立ちからみても、複雑な人物関係の中で Dorothea 中心のものと Lydgate 中心のものが重要だとみなされるのも頷ける。その中でたとえば、*The Mill on the Floss* の Maggie や *Romola* の Romola のようにうまく発展段階を踏んで成長していくのは Dorothea であり、Lydgate は挫折していく。

Celia は初めの頃は姉 Dorothea によって“a yoke”につながれているように感じており、Dorothea は Casaubon との結婚生活では迫ってくる“a new yoke”を恐れ、また Lydgate は Rosamond を“the burthen”と考えてこの軛に甘んじる。Eliot は人間のいろいろな営みの中で異質な者同志が、このようなつながりに苦しみながらも、何とか暖かい絆を持つようとする様を描いている。ここでは Dorothea 中心のプロットに焦点を当て、彼女と Casaubon、Will Ladislaw とのつながりに注目しながら、彼女が選択し成長していく様を辿ってみたい。

Dorothea と Casaubon は結婚生活の初めから互いに絆と呼ぶより軛としての結びつきを感じているが、これは周囲の現実的実際の人々、特に Celia の目から見ればそれほど驚くことではなかった。Dorothea はなぜそのような結婚を自ら望んでいたのか。彼女にそこまで思い切った行動をとらせた要因は、まず第一章での Dorothea と Celia の会話から窺える。二人は母の形見の宝石類を前にしてそれぞれの反応を示す。平凡な令嬢の Celia は当然のことながら宝石には夢中でどれも欲しくてたまらないといった様子なのに比べ、Dorothea は激しい宗教的情熱や理想の持ち主だったから宝石などいらないと言う。そう言いながらも Dorothea は美しいエメラルドを手にしてうっとり眺めている。しかも彼女は「宝石はこんなに美しいからこそ『ヨハネの黙示録』の中では、霊的象徴として用いられているのよ。まるで天国のかけらみたいだわ。」と言って、宝石の輝きにわきあがる気持を宗教的歓喜にすりかえようとする。この Dorothea の様子をみた Celia は「お姉様はおっしゃることとなさることが必ずしも一致してはいないのだから。」と言う。Dorothea は自己満足を伴う幻想を持ちあわせているから、現実を幻で覆ってしまっただけでその現実を自覚できない。Celia の言葉は、この現実と幻想の二重性を指摘している。

類まれな知性に輝く Dorothea と全く常識的で現実的な Celia だが、Reva Stump が指摘するように Celia が Dorothea に呼びかけるときに用いる “Dodo” は dodo に通じ、それがポルトガル語の silly を意味する語に由来していることを思えば、¹ 姉妹の互いの位置づけは皮肉に感じられる。当時の若い娘に似合わず、農家の住居設計に情熱を燃やしたりしていつも何かに献身したいという夢をみている19世紀の「聖テレサ」は、Casaubon に対しても愚かな幻を描いてしまう。

Casaubon との結婚は Dorothea の三つの大きな選択の最初のもので、彼女は Celia に代表される周囲の常識的見方など気にもとめず幻へ突進していく。Casaubon をめぐってかわされる姉妹の会話は全く滑稽である。Dorothea が彼を「ロックの肖像」に似た人だと言えば、Celia はロックには毛のはえた白いあざがあったのかと返す。ある一人の人物に対して好意を持つ者と持たない者とは、ここまでくい違ふのかと思われる会話がやりとりされる。そして Celia には全く醜いときえ見える Casaubon が Dorothea にはすばらしい風采の人に見え、彼を「現代のアウグスチヌス」だと思ひこみ、せめて “a lamp holder” としてでも傍で献身的に仕えたいと願う。

そんな Dorothea だったが新妻としてローマに滞在している間に幻は消えていき、現実がさまざまな形で彼女の前に現われる。まだ若く狭い世界しか知らない Dorothea が、いきなりローマへやってきても、ただその古い都の重圧の下で孤独に喘ぐのみである。新婚の夫はローマと同様に、今、生命ある人間とは何の関わりもないように見える。彼が “I live too much with the dead. My mind is something like the ghost of an ancient . . .”² と自ら語ったように、彼は現在生き続けている血の通った人間の目でローマを見ることもない。彼にとってここは *The Lifted Veil* の Prague と同じく古い歴史をもつだけの、生氣のない街であり、過去が過去のまま静止している。つまり研究のため一つの場所にしかすぎないのである。Barbara Hardy が述べているように、Casaubon には歴史というものは現在をも含んでいなければならないという認識が欠けている。³ 彼は過去をそのまま組みたてようとして、古びて変化したり荒廃したものを探し求めているにすぎない。だから過去の芸術に触れたり過去の遺跡を目の前にしても、何の感動も覚えず喜びに酔うこともない。

一方、Dorothea には、あくまでも現在につながる過去が重要なのであつ

て、彼女が過去を必要とするのは現在をいかに生きていくかを知るためである。遠い昔のミイラのような Casaubon と若さに溢れる Dorothea とでは、両者の間にいかなる絆があり得ようか。歴史的感覚の相違からこのような亀裂が生じている事を Dorothea は感じる。この状況下の彼女について Eliot は、「横たわれるアリアドネ」の像とその側に立つ Dorothea の姿を見かけた画家 Naumann に次のように語らせる。“There lies antique beauty, not corpse-like even in death, but arrested in the complete contentment of its sensuous perfection: and here stands beauty in its breathing life...” このように Naumann は生氣あふれる Dorothea を賛美し、暗に彼女と Casaubon が全く異質な存在であることを示唆する。

また、二人には思い出という意味での共通の過去もなかった。思い出を語り、いたわり合うことで生じてくる共有の過去は、愛情の土壌となるであろうに。二人の言い争いがこの亀裂を表面化する。Dorothea が何とか夫の研究を手伝いたいと思う余りに口に出した事に対して、Casaubon は潜越だと言わぬばかりに今までになく立腹する。この最初の選択の段階では、Dorothea は幻の中からのぞいている現実には気づき始めている。しかし、その現実を認識する苦しみだけで精一杯であり、彼女には苦しみの原因だと思える Casaubon も、やはり苦しんでいるということにはほとんど思い到らない。

だが Eliot は結婚に失望したのは Dorothea の方だけではないことをも語っている。Casaubon の立場からすれば、結婚すると秘書に対するように警戒する必要のない助手が得られるであろうし、それも若い妻ならば彼の能力を“powerful”と思うであろう。友人の批評にも耳をかさず、何の進展性もない研究を孤独に続けている彼には、やはり自分が求めているものは単なる幻ではなかろうかという心の葛藤があるが、彼の仕事に対する Dorothea の詮索がそんな彼を苛立たせる。「カソーボンとドロシアとの結婚は、エゴイズムとエゴイズムのぶつかり合いであった」⁶ のであり Casaubon もそれ故に苦しみ、その苦しみの中から第二、第三の選択を Dorothea に課すことになる。Dorothea はその選択を経て、エゴイズムから脱し成長しなければならない。

Dorothea の第二の選択は現在と未来のつながりに関わる。Eliot は人生を過去—現在—未来のつながった流れとしてとらえる。そして過去は現在

と切り離し得るものではなく、現在を支配し現在の中に生きるものである。⁶ それ故に、登場人物がその流れの中で選択という決断を迫られる時、過去のもつ意味は大きい。このように過去—現在のつながりは強いが現在—未来はどうであろうか。

人は未来を予想はできるが、はっきりと見通すことはできない。予知能力をもつ恐ろしさは *The Lifted Veil* に描かれているが、人はやはりそんな力を持たないが故に、何とかして現在の自分の思いを継続させ実現させたいと願う。当然そこに立ちはだかるのは死である。Tina (*Mr. Gilfil's Love Story*) の場合であれ、Maggie の場合であれ、死は残された人びとに悲しみを与え、彼らの後の人生に大きな影響を及ぼしはするが、それは決して亡き人の意図したことではない。ところが *The Mill on the Floss* の中で、病床の Tulliver 氏が息子 Tom に、仇敵 Wakem とその子孫への復讐を誓う言葉を聖書に書き込ませる場面がある。この Tulliver の遺言は、意図的に自分の死後までも彼の気持を Tom を通して残し、成就させようとするものである。このような遺言は他者の未来を現在のうちに束縛するものであり、束縛を前にして決断を迫られる人物は、それに従うか否かを何らかの基準で決め、どちらかを選択しなければならない。Dorothea もこれと同じような選択にさらされる。

Dorothea が Casaubon に対して抱いているさまざまな違和感や不安は、彼の方でもまた彼女に対してもっている。が彼にはそんな心理的苦痛のみならず肉体的不安も訪れる。彼は致命的発作がいつ起こるかかわからない状態に悩まされるのだが、そんなある晩、彼は Dorothea に問いかける。それは彼の死後、Dorothea が彼の望み通りに行動してくれるかどうかを問うものだった。夫が新しい重荷を負わせようとしているのだと彼女は思うが、何とも返答ができない。二人の緊迫した雰囲気が続く。

'You refuse?' said Mr Casaubon, with more edge in his tone. 'No, I do not yet refuse,' said Dorothea, in a clear voice, the need of freedom asserting itself within her; 'but it is too solemn... to make a promise when I am ignorant what it will bind me to. Whatever affection prompted I would do without promising.'⁷

愛情に促されれば何でもしようという彼女のこの言葉は、Romola を思

い起こさせる。Romola も忍耐と根気を伴う作業を古典学者である父の傍で黙々と行うが、彼女はこの苦痛に時には涙することがあるにせよ、父への愛情故に何とか耐える。しかし Dorothea の場合はどうであろう。彼女は夫に対して即座に返事ができず、翌朝まで待ってくれるようにと頼む。すでに彼女は夫の研究が無意味なことに幾分かは気付いており、また Will からその研究は徒労に終るであろうことも知らされていた。それ故、彼女は一方では毎日毎日、ミイラのような過去の遺物ばかりを拾い集めて分類している哀れな自分の将来の姿を思い描きながらも、また一方では決して報われることのない研究をこれまで重ねてきた夫が死と向き合っているのだから、妻として夫の望むように行動すべきだろうかとも思う。彼女は悩みぬく。一夜苦しんだ末、輓につながれようと決意したものの、朝になって Casaubon に会うと、再び半時間後まで返事をのばす。

第二の選択の場面では、諾否の返答に彼女は迷うが、その点よりもむしろ返答の延期自体が彼女の選択といえる。この時点で考えれば、この諾否はいずれを選んだにせよ、ここで彼女の未来をつかんで、彼女の人生を左右し、また今後の彼女に苦しみを与えるはずであった。しかし、実際には Casaubon の死後に、彼女の諾否をめぐる迷いは全く無意味なものだったことを彼女は知る。それは Casaubon の遺言補足書によって、Dorothea は夫に信頼されてはいなかったことを実感したためである。彼は信頼感から妻に選択を求めたのではなかった。それなら Dorothea はそのような諾否の選択などする必要もなかったのである。「返答できない」ことが、彼女にとってもっとも正直な誠実な返答だといえるだろう。

ここには現実の自分をみつめようとしている彼女の姿がある。返事を伝えぬうちに夫が一人で息絶えていたことで彼女の苦しみは大きくなるが、彼の遺言補足書をめぐってその苦しみは別の感情へと変わっていく。

Casaubon の死後、もし Dorothea が Will と再婚すれば彼の遺産は彼女には譲らないという遺言補足書は、結婚後に密かに作られたもので、Dorothea への問いかけの意図をはっきりと示すものだった。Dorothea の Will との再婚を何とか妨害したいという彼の意図、彼女の未来までその手中に捕えておこうとする意図は、逆効果をもたらし完全に失敗する。というのは、今や彼女の心には Casaubon への反感と Will への思慕しかない。この段階では彼女はまだ Will への思いをはっきりとは認識していない。その思いが明らかになるのは徐々に時間を経た後のことである。Dorothea

にとって Will への愛を認識することは Casaubon を完全に否定することであり、幻を描いて結婚した彼とのつながりが切れ、その軛から逃れることでもある。Dorothea と Casaubon との生活は過去につながる思いを共有することもなく、未来へつながることもなかった。ここでまた彼女は、選択すべき事柄に直面する。

Eliot の作品では、ある場所からの逃避や、あるいは過去を捨てることによって問題が解決することはない。*Silas Marner* の Silas の場合のように故郷を捨て去っても後に報われることもあるが、それは愛情深い生活の積み重ねによるものである。Lydgate は Middlemarch から去っても、やはり引きずっている性格的もろさはそのままであり、周囲の状況を変えてはみたものの結局は失意のうちに一生を終える。そして Dorothea は、目の前の問題と向き合うことで成長していく。

Dorothea の第三の選択の場面を考える前に、彼女と Will Ladislaw との関わり方をみておこう。二人が初めて出会うのは、婚約した Dorothea が Lowick を訪れる時である。直接会う前に、彼女はまずある部屋に飾られた幾枚もの小画像を目にする。一族の人びとの肖像画の中で彼女の注意をひきつけたのは Casaubon の伯母、即ち少し後に出会うことになる Will の祖母のものであった。Casaubon のそっ気ない言い方から、Dorothea は絵のモデルの過去に何かを感じとる。この Lowick 邸の当主となっている Casaubon が一度も会ったことがない伯母だという説明から、一族から消えていった人であろうことが察せられる。

その後 Dorothea 達が庭を歩いている時、“the chief hereditary glory”である古木をスケッチしている Will に出会う。そのスケッチには岩だらけの堅い地面と木々、そして池が描かれている。もちろん Will は平凡な普通のスケッチをしているつもりであろうが、この一枚の絵が彼と Dorothea の未来に関して何か重要な意味を含んでいると思われる。Eliot は *Romola* の中で、一見、誰とも何のかかわりもないように見える絵に象徴的意味をもたせ、結末を予言する動きをさせているが、この Will のスケッチはどうであろう。

Jerome Beaty が Ladislaw と Dorothea の結婚は作者の最初の構想の中に入っていたと指摘するように、⁸ Will の登場とともに二人が結びつく気配が用意され、このスケッチに表現されていると思われる。「堅い地面」

は堅固な現実を示すものであろうし、代々伝わる「古木」は長い時の流れを経ながら、なお生き続けるもののシンボルのようにみえる。木が大地に根を下して生き続けるように、「古木」が子孫を残すことで生命を絶やすことなく継承していく Dorothea なら、その彼女に現実を与える大地は Will である。「池」は眺める人の心によって自己中心から離れていく時の「窓」の働きにも、自己中心に向かう時の「鏡」の働きにも用いられる。⁹ この段階における Dorothea の成長のあいまいさが、「私にはこういうものはわかりません。」という彼女の言葉に表われている。彼女が「池」を「窓」として眺めるほどまで成長するのは第三の選択においてである。

Ladislaw は多くの批評家から *The Mill on the Floss* の Stephen と同様に下らぬ男だとみなされ、なぜ Dorothea のような女性が彼にひかれるのかと批判される。F. R. Leavis は "... he [Will] has no independent status of his own—he can't be said to exist."¹⁰ と評している。これは Dorothea に関する Will の発言が、作者の意図の代弁に過ぎず、彼は実体のない存在だと思われる点を指摘している。それにしても、Eliot の投影とも言うべき Dorothea に対する Will の位置は、Maggie に対する Stephen のそれよりも重要である。Will はむしろ Stephen と Philip の二人の役を担っていると思われる。Philip が Maggie に対して客観的にあるいは作者の代弁者として、未熟な彼女の偏狭な自己否定を批判し、喜びは善であると説いたように、Will も Dorothea に最高の敬虔とは楽しむことだと語りかける。

Dorothea は暗いイメージの Casaubon と、光のイメージで語られる Will の対照を感じとっている。Casaubon の方は、彼の館も "melancholy-looking" でそこにある家具調度も古く、暗い色調のものであり、何よりもその住人の彼自身が健康のすぐれない輝きのない人物である。ところが Will の方は、"sunny brightness" をもった青年で、髪までもが光を振りまいているようにみえる。しかも Casaubon の話し方は演説口調で、まるで説教か訓辞を思わせるのに対し、Will と Dorothea の会話にはこれこそが本当の会話だと思えるくつろぎがある。この Will の光で Dorothea が夫に対して抱いていた幻はいつそう薄れて、彼の研究の現実までもが見えてくる。時々 Will に会うと、Dorothea は牢獄の窓から明かりがさし込んだかのように感じたが、彼女は夫と Will との不和のために、Will が「暖かい活動や友情」の世界へ去っていくのを「墓」の出入口に立って眺めているだけであ

る。そんな状況の中で彼女は Will の世界こそが生きたものだと思う。彼女にとって Will 自身が生きた現実を意味する。

Dorothea に第三の選択のきっかけを作る遺言補足書は、遺産に関するものである。David Daiches が指摘するように、この作品中のほとんどの人物が経済面の問題におつかるが、¹¹ その反応はさまざまで、いかに対処しているかが重要な点であろう。Dorothea の場合はどうであろうか。先にも述べた通り、Casaubon の遺言補足書にはもし Dorothea が Will と再婚するなら、かつて Casaubon が Dorothea と婚約した際に取り決めた遺産を譲らないと書かれている。Casaubon の遺産相続問題は、Featherstone の遺言をめぐる話とは対照的である。Featherstone の場合は、周囲の人びとの騒動がコミカルに描かれている。Featherstone に何らかの縁のある者たち (Garth 家の人びとは別として) は、彼と自分との絆を主張し彼の回りをうろついているが、彼等の目的はもちろん彼の遺産そのもの、金銭そのものである。

Casaubon の遺産の問題は金銭的なものではない。彼は元来、金銭にうるさい方ではなく、たとえば Dorothea が病院への寄附の話を持ち出してもあまり強く反対はしない。その Casaubon が金銭問題で鋭敏になるとすれば、それは物質的執着心ではなく、“another passion” によるものだった。この “another passion” とはおそらく嫉妬のことであろう。彼はその上に Will に対しては、Dorothea をめぐる嫉妬以外の感情を早くからもっていた。Dorothea が Will にも財産相続の資格があるはずだと説いても、彼は全く冷淡だった。この場合もやはり問題は金銭上の事柄ではない。Casaubon は Will に対して、縁者に対する当然の経済的援助をしているという気持ではなく、必要もないのに恩恵を施しているという偽善的な思い上りの気持を抱いていた。この思い上りによる物質的援助のみが二人の間の唯一のつながりであり、縁つづきというなつかしさの混った親近感など皆無だった。だから Casaubon にしてみれば、彼の遺産のほんの一部でも Will に譲ることなど論外なのである。

Casaubon の Will に対する拒絶的態度は、Dorothea の誰に対しても何とか相手を受け入れようとする姿勢とは全く異なっている。彼女の方は、Will の祖母の肖像画を見た直後、Will 本人に出会った時から彼らを Casaubon につながる一族なのだと感じとり、認めていた。周囲が容認しな

い生き方や結婚のために一族から無視され消えていく者もいれば、そのような人に対してもやはり絆を認めようとするものもいる。Casaubonから親しくは扱われない Will を見ている Dorothea からは、非合法的結婚のために兄からも友人からも冷たくつき離された Eliot 自身の苦しさが窮える。

Dorothea が Will とのつながりに自信と安らぎを感じている頃、Lydgate と Rosamond の間の亀裂は大きくなろうとしていた。そこで Dorothea は二人が互いの信頼感をとり戻せるように努力すべく Lydgate の家へでかける。しかしそこで彼女が目にしたのは、泣き崩れている Rosamond と、その彼女の両手を握りしめている Will の姿だった。この二人の様子を誤解し、ショックを受けた Dorothea は、用件も告げずに帰宅してしまう。彼女が嫉妬や絶望の苦しみの中で、「私はあの人を愛していたのだわ。」と呻くように言う時、はじめて自らの“passion”にはっきり気付くのである。

こうして Will への感情を自ら認めた Dorothea は、もはや宝石の美しさに魅せられながらも理屈を述べている彼女ではない。Will の存在によって、また彼への思いを通して、Dorothea は崇高に生きようとする理性と、人としての自然な感情とを合わせもって consistency を得たといえるだろう。そのように成長した Dorothea であればこそ、再び Rosamond を訪れる決意をする。Dorothea 自身の苦悩が、やはり苦しんでいるであろう他者への sympathy となつてほとぼしつたのである。エゴイズムのかたまりのような Rosamond も、Dorothea の姿には感動し、一時的にせよ、相手を思いやる気持になって Dorothea の Will に対する誤解を解く。

Dorothea にとって Will への愛の認識は Casaubon を拒絶することである。しかし、今なら Casaubon が抱いた嫉妬心や不信感による苦しみが、彼女には理解できるはずである。だから Dorothea が書斎にいる時 Will が訪ねてくるが、彼女はとっさにこの書斎には通せないと思う。Casaubon が神話学の研究のために多くの時間を費やした部屋だから、彼女にはいまだに夫の禁止の声が感じられる。しかしその時彼女は窓の外へ目を向ける。この動作、すなわち窓から外を見る動作は、自己にこもらず他者へ向かう心の表われであろう。そして今だからこそ、彼女は姿の見えない Casaubon に対してはっきりと言いきる。「私が Will を愛しすぎるとしたら、それはあの人があまりにもひどく扱われてきたからです。」と。古くて

暗い書齋に Will という光を入れることは、Casaubon の軛、すなわち“dead hand”をはね返すことである。Dorothea は第三の選択において、現実感のある Will との新しい絆によってより広い sympathy をもち得る人間へと成長したのである。

そしてここで Dorothea は人生の新しい出発点に立った。彼女が書齋へ Will を迎え入れた時、雷が轟き、雨がざーっと降り始める。新しい生命を得て、二人が再び歩き始める暗示であろう。

舞台は選挙法改正に揺れ動く19世紀前半の一地方町である。Dorothea Brooke と Will Ladislow の結びつきは周囲にかなりの動揺をひきおこしたが、時は流れ、素姓の知れぬ Ladislow がいつしか Brooke 家に迎え入れられた。その息子は、その後継者となった。ここには新しい時代へ向かって階級意識の揺れ動きも感じられるが、Eliot が語ろうとしているのはそのような社会的動きそのものではなく、そこに到る原動力、すなわち人と人との暖かな絆、愛情に裏付けされた絆の重要性であろう。彼女は、必要なものは法律でもキリスト教義でもない、現実を見つめて共感する絆なのだと言っている。その背後には、常に他者との関わりの中で、sympathy をかきたてることで絆を保とうとした作者自身の生き方があり、選択がある。

Dorothea の苦しみつつも成長していく姿は、Eliot 自身の苦悩や喜びから生まれ出たものであろうが、そこにあるのは決して個人的感傷のみではない。Eliot が目を向けたのは個人にとどまらず、広い社会であった。彼女が少なからず影響を受けた Comte によれば、「幸福はもっぱらこの共感の本能に依存するはずである。それは、社会生活の中で自由に発揮できる唯一の感情は好意しかないからである。」¹² Eliot も sympathy をもつことで、社会は成り立ち発展していくと考えた。*Middlemarch* の網の目のような人間関係の中で、人の救いとなるのは sympathy である。また同時に、「ひとりの人間は、こうした社会的拡大によって、自己を永続させたいという傾向の正常な満足を得るであろう。」¹³ という Comte の言葉は、人はその sympathy から喜びを得ることを示唆している。そして個人がこのように他者に共感することができるようになればなる程、その人は自分自身を進歩させ、そして社会を進歩させ、さらに個人的に社会的に進歩する状況を作り出すのである。¹⁴

しかし Dorothea が関わっている *Middlemarch* の住人は、決して高潔な

人びとばかりというわけではない。多くの弱さや欠点をもった人びとの集団であるが、作者は、彼らを咎めることなく、その中でなお絆を求めて、Dorothea が、Lydgate が、そして多くの人びとが泣き笑いつつ成長しようとする様を暖かく眺めているのである。

注

- 1 Reva Stump, *Movement and Vision in George Eliot's Novels* (University of Washington Press, 1957), p. 174.
- 2 George Eliot, *Middlemarch* (The Penguin English Library, 1966), p. 40.
- 3 Barbara Hardy, *Particularities: Reading in George Eliot* (London: Peter Owen Limited, 1982), p. 118.
- 4 George Eliot, *Middlemarch*, p. 220.
- 5 川本静子『G・エリオット』(冬樹社, 1980), p. 203
- 6 同上 p. 95~96
- 7 George Eliot, *Middlemarch*, p. 519
- 8 和知誠之助『ジョージ・エリオットの小説』(南雲堂, 1967), p. 202.
- 9 F. B. Pinion は *A George Eliot Miscellany* の中に、Pre-Novel Writings の一つとして二人の妖精の話を入れている。一人は終日、ただ水面にうつる自分の姿を眺め、あと一人は同じ水面にうつる水蓮の美しさを喜ぶ。前者は水面を「鏡」として用い、後者は外の世界を見る「鏡」として用いている。
- 10 F. R. Leavis, *The Great Tradition*. 1960. (London: Chatto & Windus, 1979), p. 75.
- 11 David Daiches, "An Important Moral Centre" *George Eliot: Middlemarch A Casebook*, ed. Patrick Swinden (Macmillan, 1972), p. 113.
- 12 清水幾太郎『世界の名著「コント、スペンサー」』(中央公論社, 1970), p. 206.
- 13 同上 p. 206.
- 14 Simon Denith, *George Eliot* (The Harvest Press Limited, 1986), p. 24.

David Copperfield —— 過去への回帰*

船橋 麻由美

SYNOPSIS

In *David Copperfield*, the protagonist David tells the story of his own life. He shows us that every event which happened in his younger days, how insignificant it seemed at first, proves to be related to later events. David is satisfied with his present life: he has achieved fame and is enjoying his perfect domestic life. He owes his happiness to what he experienced in his past. His complacent retrospect, however, makes us suspect whether his past is significant to him. He does not seem to have been affected by his past. His nature and character remain the same from first to last. His intention in telling his story is not to record his spiritual growth, but to reproduce his past in his present life. His own past is his primary interest, for he can love no one but himself. David's autobiography reveals his unconscious self-love.

David Copperfield (1849-50) は、主人公 David が語る彼の生涯の記録である。また Dickens が、自分の過去を語ることを試みた作品でもある。¹この二点は、興味深い様相をわれわれに示している。作者 Dickens が自分の過去を振り返るといふことと、主人公 David が自分の人生を語るといふことが、並行しあるいは重なり合って作品に組み込まれているのである。そのため David を Dickens と完全に切り離して論じるのは妥当でない。David には作者 Dickens が、映し出されているからである。しかし一方、David を Dickens の自伝的分身としての観点からのみ論じることも危険である。David は、あくまで自分の人生を持つ独立した登場人物なのだ。

この David と Dickens の互いの関わりとの接点となっているのが、「過去」と「思い出」の問題である。Barbara Hardy によれば、*David Copperfield* は“a novel of memory, a novel which explores the past, re-enacts it and explores its meanings”² である。本稿では *David Copperfield* を「思い出の小説」として捉え、「過去」と「思い出」が、David にとってどのような意味を持つのかを論じ、過去を振り返るといふ行為を軸として作家 Dickens が David とどのように関わっているかを考察していく。

1

金曜の夜半に生まれた David は、近所に住む口さがない女たちから、不運な人生を送るであろうという有難くない予言を頂戴した。この予言が当たったか、はずれたかについて彼は次のように言うだけで、その場では何も語ろうとしない。“I need say nothing here. . . because nothing can show better than my history whether that prediction was verified or falsified by the result.”³ これはもちろん今後の展開についての予告であり、作品が David の生涯の物語であることをわれわれに印象づけているのである。同時に作品の語り手としての「現在」の David の存在を、われわれに認識させるエピソードにもなっていることに注目したい。つまり過去の出来事を語っている最中に、しばしば「現在」の David が姿を現わし、「現在」の視点で当時を振り返るといふ形式になっているのである。この「現在」の David の視点は、「過去」の David と対比し、当時の出来事をきわ立たせている。そしてわれわれは「現在」と「過去」という時間の交差を手掛りにして、David の思い出が現在にどのような連続性を持っているかを探ることができるのである。

Angus Wilson は、David が過去と現在の自分との繋がりを常に意識しながら物語を展開していると指摘する。⁴ このことは、同じ一人称小説の *Great Expectations* と比べてみれば一層はっきりする。ここでは「現在」の Pip が顔を覗かせ、当時の自分や出来事に対して解説をしたり注釈したりすることはない。われわれは Pip と共に人生を歩んでいくのであって、未来に彼を待ち受けているものが何であるかを前もって予測することはできないのである。一方 David は、われわれにしばしば予告を与えている。偶然のような出来事や感情が、実は彼の後の人生に重要な意味を持つこと

になるということを、前もってわれわれに心構えさせているのである。これは David の語り手としての態度を、はっきり示しているといえるだろう。つまり David には、「現在」の自分が「過去」の自分を振り返っているという意識が強いのである。このことは、Pip の時間の流れに沿った物語の進め方と比べると明らかである。David は、「過去」の自分が「現在」の自分にどのような関わりを持っているかを探ろうとしているのである。彼は過去と現在を一致させようとする意図を持っているのだ。さてそれでは彼の思い出は、彼にとってどのような意味を持っているのか考えてみることにしよう。

2

まず David の一番古い記憶が、母親と乳母 Peggotty のいる居間の場面から始まっていることに目を向ける必要がある。幼い David にとって自分の家は、安全で幸福な場所であり、外の世界とはっきり区別された場所であった。自分が生まれる前に亡くなった父の墓を窓から眺めた時の印象を彼は次のように述べている。

...I have of my first childish associations with his [David's father's] white gravestone in the churchyard, and of the indefinable compassion I used to feel for it lying out alone there in the dark night, when our little parlour was warm and bright with fire and candle, and the doors of our house were—almost cruelly, it seemed to me sometimes—bolted and locked against it. (Chap. I, p. 2)

幼い David には、炉の燃える暖かい居間が全世界だったのである。

彼は生家での楽しい思い出をこと細かに書き連ねている。庭で枝もたわわになる果実を母ともいだこと、居間で Peggotty にワニの本を読み聞かせた時のことなど、どれをとってもわれわれの心を和ませる。“historical present”が用いられているということもあって、その描写には時間が永遠に止まってしまったような絵画的な美しさがある。しかしこの思い出は、単に美しいというだけにとどまらないのである。われわれは、ときに強い愛着を感じ懐しんでいる David に気付く。彼の思い出は、いつも変わるこ

とのない理想的に美しい家庭の姿なのである。実際この生家での思い出には、郷愁以上の意義があるのだが、それについては後で述べることにする。

さて幼年時代の平和な生活は、母と Mr. Murdstone の結婚で破られることになる。初めて Mr. Murdstone に出会った時、David は彼に反感を抱き、嫌悪と嫉妬を感じる。本能的に Mr. Murdstone を母と自分の間を引き裂く者、自分の楽園の破壊者だと知っていたといえる。Mr. Murdstone は、やがて David の牧歌的な世界に、時間と規律を持ち込むことになるのである。

母と Mr. Murdstone が結婚するまでの間、David は Peggotty の計らいで彼女の兄のもとに滞在することになった。彼にとって生まれて初めて家を離れる体験である。その時の様子を彼は次のように語っている。“It touches me nearly now... to recollect how eager I was to leave my happy home ; to think how little I suspected what I did leave for ever.” (Chap. II, p. 26) 彼は自らの意志によって、進んで幸福な家庭を去ったのだ。楽園を去る者は、再びそこへ戻ることはできない。彼は帰宅してそのことを痛感するのである。

Yarmouth で楽しい二週間を過ごして家に戻った David を迎えたのは、母と彼の新しい父親になった Mr. Murdstone であった。優しい言葉ひとつかけてくれぬ Mr. Murdstone に、David は頑なに心を閉ざす。おまけに David が Yarmouth から帰ったその晩に、Mr. Murdstone の未婚の姉が家政を取り仕切るためにやって来たのである。彼女は到着する早々、David と母の一挙一動を意地悪く監視するのだった。Murdstone 姉弟の無慈悲な締めつけのせいで、David の無邪気で大らかなふるまいは影を潜め、家庭ののびやかな暖かさは、すっかり失われてしまうのである。

David は窮屈な思いで毎日を過ごすのが、とうとうある日彼と Murdstone 姉弟を終生の敵同志にしてしまう事件が起こったのである。課せられた勉強を満足にこなせない David に業を煮やした Mr. Murdstone が、彼を杖で打とうとした時のことである。その罰から逃れようと必死だった David は、義父の手に力いっぱい噛みついたのだ。David は打ちすえられ、数日間部屋に監禁された後、Salem 塾へと厄介払いをされる。そしてこの事件が、David にとって人生の新しい転機となったのである。

David は、Yarmouth へ行くために喜んで家を後にした。しかし Salem 塾行はそうではなかった。彼は Murdstone 姉弟によって家庭から追放さ

れたのだ。追われた家庭には、二度と戻ることはできない。Salem 塾から休暇で家に帰ってきた時、Murdstone 姉弟は留守で David は母と Peggotty と昔のようにお茶を楽しむことができた。彼はまるであの楽しかった頃が戻ってきたかのような錯覚に陥る。しかし Murdstone 姉弟の帰宅で、David は否応なしに現実に引き戻される。彼の居場所は、どこにもなかったのである。

暖かい家庭を失ったということは、単に David が世間の荒波に押し出されたという意味を持つばかりではない。彼の家庭追放は、後の人生に大きな影響を与えているのである。それでは幼年時代を過ごした家庭の思い出は、David にとってどのような意味を持っているのか。またその家庭を追われるということは、何を意味しているのだろうか。

3

Dickens の作品では、家庭は見過ごしにできない役割を果たしている。Dickens は、幸福な家庭生活の描写に特別関心を払っていたと思われる。当時は円満な家庭生活が、人々の関心を集めていた時代である。社会の風潮に敏感な彼が、家庭の理想的な型を描き出したのは、当然のことといえる。しかし彼の描く家庭には、社会一般的な幸福の象徴にとどまらない意味が隠されているのである。Dickens 自身にとって、暖かい家庭は憧れだったのだ。このことは、彼の幼少年時代の体験を振り返れば容易に納得がいく。数回にわたる引越しと家族から離れてひとり靴墨工場で働かなければならなかった孤独な思い出が、Dickens に理想的な家庭像を創らせているのである。また彼が自分の結婚生活に対して抱いていた不満が、幸福な家庭の図という反動的な形をとって作品中に現われたとも考えられるのである。

一見したところ David は、Dickens のそのような心理を映し出した典型的な主人公といえそうである。子供の頃に家庭を追われ、転々とした挙げ句に、Agnes という理想的な妻を迎えるのだ。しかし実際は David の「家庭」は他と趣を異にしているのである。彼にとって幸せな家庭生活は、冒険や艱難辛苦の末の報酬ではなく、むしろ人生の目的そのものであったといえるのだ。ここで Angus Wilson の示唆に富む指摘に耳を傾けてみよう。彼は Dickens の作品が醸し出す雰囲気は次のようなものだとしている。
“the fundamental and complex meanings of ‘travelling’ and ‘home’ that

lie deep in Dickens' world.”⁵ David の遍歴を人生の旅と置き換えてみるならば、David が自らを“tired traveller”（「疲れた旅人」）（Chap. XXXIX, p. 567）と称したのも単なる比喩として片付けるわけにはいかなくなる。暖かい家庭を探し求めて旅を続ける主人公というわけである。

David の場合、思い出の一番古いものが自分の生まれた家についてであったこと、そしてその家を Murdstone 姉弟によって追われたということが重要な点なのである。David が家を追われた時点から、彼の失われた楽園を再び取り戻すための旅は始まったといえるからだ。そして彼の人生の旅の目的地であり、探し求める幸福の原型となっているのが、幼年時代を過ごした家庭なのである。

それでは過去に失われた幸福を探し求め、それを現在に再現することで David が得たものは何であったのだろう。

4

David の過去への回帰は Agnes との結婚で完成をみる。Barry Westburg が、二人の結婚を“consecration of the past”⁶ と呼んでいるほど、二人の結婚生活は David が生まれ育った家庭での生活と酷似している。Agnes との結婚生活と David の生家に共通しているのは、彼を外のわずらわしい世界から遮断してくれる気持ちのよい隠れ場の雰囲気であった。それは“child-wife” Dora と過ごした家庭が与えることのなかった心の安らぎである。Dora との結婚生活では、彼女を愛し、ままごのような生活を一方では楽しみながらも、彼はいつも何か足りないという漠然とした思いに悩まされていたのだ。Dora との家庭は、落ち着いたものではなかった。彼女の家政に対する無知から、David は女中や出入りの商人たちとの厄介な争いごとに巻き込まれるのである。

Dora の死後、David は Agnes と結婚し幸福な家庭を築く。その家庭は、暖炉の火が燃え子供たちの笑い声が絶えない。乳母 Peggotty も年はとったが健在である。彼女が David のものだった古いワニの本を子供たちに見せてやったり、末の子によちよち歩きをさせているのを見ると、David は自分の幼い頃を思い出し、子供たちが自分の姿と重なるのだった。このように Agnes との家庭は、物語の始まり同様“a strong sense of the indoors (as at the beginning), of the hearth, of unassailable occupancy...”

(Westburg, p. 107)なのである。

こうして David は思い出を辿り、幸福だった幼年時代の家庭生活を Agnes との結婚によって再現することができたのである。今や彼は幸福のただなかにあり、物語は彼の完璧な幸福のうちに幕となるかのように思われる。しかし David が満足を感じている「家庭」には、あるそらぞらしさが見受けられるのだ。そのことは彼が大切にしている生家の思い出、彼にとっては幸福の原型であった当時の思い出に象徴的に表われているのである。

Betsey 伯母を憤慨させた“Rookery”（鳥の家）という屋敷の名前からしてそうであろう。巢はあっても肝心の rook が一羽もないのである。庭の鳩小屋には鳩は一羽もおらず、犬小屋に犬はいない。後に、母と Mr. Murdstone の結婚を知らされて茫然と庭を歩きまわる David に、黒い犬が吠えつき飛びかかってきたというエピソードの意味するところは明らかである。外の世界からやってきた Mr. Murdstone が、犬小屋だけで犬のいないおとぎ話めいた David の家に現実の犬を連れてきたのである。

また青年 David が再び生家を訪れた時、かつての面影は残っていなかった。“Rookery”という名の由来を唯一表わし得ていた、あの古巢すらなくなっていたのだ。おまけに今そこに住んでいるのは“a poor lunatic gentleman” (Chap. XXII, p. 320)なのである。その気の狂った紳士は、幼い David がかつてしていたように窓際に座り、墓地を眺めおろしているのだ。このように David にとって最良のものであるはずの子供時代の思い出が、何かちぐはぐで実体のないものとして描かれているのは皮肉なことといえるだろう。そしてその時代をそのまま再現した Agnes との結婚生活までも虚ろなものに過ぎないといえるのだ。

それではこのように実体のない過去は、何を意味しているのだろうか。David にとっては、過去を取り戻すことが人生の目的だった。再現された過去が空虚なものだったということは、人生の意義そのものまでが無であったということだろうか。彼が未来を新しく切り開いていこうとせず、過去に回帰しようとしたのは、現実からの逃避であると言い切るのは簡単である。しかしわれわれに現実感と共感を与える幼年時代の思い出を、中味のないものと決めつけることは短絡的であろう。次に David の過去の出来事が、彼にとってどのような意味を持つか考えてみることにする。

5

まず彼の幸福な思い出が、彼にどのような影響を与えているかみてみよう。これまで述べてきたように、彼の幸福の原型はすべて彼の幼年時代にあった。だからこそ彼は常に「昔と変わらない」ものを求め、そこに幸福を感じていたのである。Agnes に抱いている印象と感情は、David の「昔と変わらない」愛着をよく表わしている。

Mr. Wickfield の古い家で初めて Agnes に出会って以来、David の目に映る彼女の印象は変わらない。彼女は常に“serenity and happiness”そのものなのである。また彼女の家がある静かな Canterbury の街も、少年時代から彼に安らぎを感じさせる。

Coming into Canterbury, I loitered through the old streets with a sober pleasure that calmed my spirits, and eased my heart. . .

It appeared so long, since I had been a schoolboy there, that I wondered the place was so little changed, until I reflected how little I was changed myself. Strange to say, that quiet influence which was inseparable in my mind from Agnes, seemed to pervade even the city where she dwelt. . . I felt the same serener air, the same calm, thoughtful, softening spirit. (Chap. XXXIX, p. 564)

つまり Agnes も Canterbury の街も、David に時の推移を感じさせないのだ。言い換えれば、David は昔から現在まで変化していないものに愛着を抱いているということである。ここで注目しなければならないのは、David が自分自身のことを少年時代からほとんど変わっていない (“how little I was changed myself”) と考えていることである。彼にとっては変わらないことこそ幸福なのである。

興味深いことに David をめぐる人びとも、変化のないことに幸福を感じているのである。Mr. Wickfield は、Uriah Heep の奸計にはまって以来すっかり弱ってしまっていたが、David の訪問で昔の元気を回復する。

Mr. Wickfield, left to Agnes, soon became more like his former self. . . and had an evident pleasure in hearing us [David and

Agnes] recall the little incidents of our old life, many of which he remembered very well. He said it was like those times, to be alone with Agnes and me again; and he wished to Heaven they had never changed. (Chap. XXXV, pp. 518-19)

Agnes 自身過去の思い出を大切にしていた。Dora と Steerforth を失った心の傷手を癒すために出た三年間の外遊から Agnes のもとへ帰った David が招き入れられたのは“the unchanged drawing-room”だったのである。昔のままであることを喜ぶ彼に Agnes は言う。“I have found a pleasure. . . while you have been absent, in keeping everything as it used to be when we were children. For we were very happy then, I think.” (Chap. LX, p. 840) そしてこの「私たちはあの頃、とても幸福だった」という言葉は、Agnes だけでなく David によってもしばしば繰り返されている。彼は当時を現在より幸福だと考えているのだ。この態度こそ、彼が過去に戻ろうとする執着心の動機となっているのである。

Murdstone and Grinby 商会での屈辱的な日々のことを考えれば、やっとの思いでそこを逃げ出し、その後 Canterbury の Mr. Wickfield の家で Agnes と共に過ごした学生時代は、David にとって穏やかな安らぎに満ちていたに違いない。しかしその頃の思い出が、彼の精神的成長にどれほど貢献したかという点になると大いに疑問である。David は当時を回想して次のように述べている。“My school days! The silent gliding on my existence—the unseen, unfelt progress of my life—from childhood up to youth.” (Chap. XVIII, p. 265) また学校で自分が首席になった時のことを思い出して次のように言う。

That little fellow seems to be no part of me; I remember him as something left behind upon the road of life—as something I have passed, rather than have actually been—and almost think of him as of some one else. (Chap. XVIII, p. 268)

彼は懐しさを感じて当時を振り返ってはいる。しかし人生の幸福な一時期が、“unseen, unfelt”であり、当時の自分が「人生の歩みの中で置き去りにしてきた」、「ほとんど他人のような気のする」自分であるとすれば、その

頃の彼の幸福は現在の彼にどのような影響を及ぼしたというのだろうか。

確かに Canterbury 時代ののびやかな生活が、David を誰にでも信頼され愛される gentleman に成長させたということもできるだろう。しかし“good”（「善良な」）、“kind”（「親切な」）といった紋切型の形容詞で表わされている David の一見明るい面の裏に、われわれは Steerforth に対する卑屈な階級意識が潜んでいるのも見逃すわけにはいかないのである。このように「幸福だった」時期が、人間的に彼を成長させたとはいえないのだ。当時の思い出がぼんやりしたものとして描かれているのは、David に精神的な変化をもたらさなかったからである。David の内を、大した印象も残さず通り過ぎていっただけなのだ。

このように David の幸福な思い出は、彼に影響を与えなかったといえる。それでは悔めな辛い思い出は彼にどのように関わっているだろうか。彼にとって一番辛かった時期は、もちろん Murdstone and Grinby 商会で過ごした日々である。David はこの思い出を忘却の彼方へ追いやりたいと考えている。

I now approach a period of my life, which I can never lose the remembrance of, while I remember anything; and the recollection of which has often, without my invocation, come before me like a ghost, and haunted happier times. (Chap. X, p. 150)

この一節は、われわれに *The Haunted Man* (1848) の主人公 Redlaw を思い起こさせる。過去の亡霊に悩まされ苦しめられているという状況は、Redlaw のものと酷似しているからである。*The Haunted Man* が *David Copperfield* の前年に書かれたということや、両作品に「過去」と「思い出」の問題が取り上げられていることなどを考えれば、David と過去の関係を考察する上で彼と Redlaw の感情を対比してみることは、無意味なことではない。それどころか二人の背後には、作者 Dickens の自身の過去に対する思い入れも窺えるのだ。

自分の過去の出来事の中で Dickens が最も苦しんだのは、靴墨工場での屈辱的な時期のことである。そのことは、*The Haunted Man* では Redlaw をいつまでも悩ませる青春時代の挫かれた希望として描かれ、*David Copperfield* ではより直接的に Murdstone and Grinby 商会という形で登

場している。過去に悩まされ続けた Dickens そして Redlaw と、やはり同じように辛い惨めな体験をした David の間には、どのような共通点を見出すことができるのだろうか。

結論から先に述べよう。David には、Dickens や Redlaw に取りついてきた暗い過去の影は全く見られないのである。Redlaw が過去をひた隠しにし、過去への憎悪のため人から「悪かれた男」と噂されるまでになったあの陰鬱な激しさは、David にはないのである。「亡霊のように」後年の幸福な日々につきまとっているはずの当時の思い出は、実際は David の内に何の痕跡もとどめていないのだ。意地の悪い見方をすれば、当時の辛い思い出も David にとっては特別なものではなく、他の思い出同様過去の出来事の一部にすぎないのである。事実 Mr. Micawber が Heep の悪計をあばき David たちを破滅から救った時に、彼は Mr. Micawber との邂逅を喜び次のように考える。“... I felt devoutly thankful for the miseries of my younger days which had brought me to the knowledge of Mr. Micawber.” (Chap. LII, p. 761) ここに見られるのは過去との和解に他ならない。このように彼は過去をあっさり許してしまい、過去の惨めな経験も今になってみれば幸運だったと素直に感謝しているのである。Redlaw の過去の亡霊は、彼を陰気な自室に閉じ込めてしまったが、David は過去の惨めさのおかげで現在の幸福を手に入れることができたのである。

同様に Dickens の心の傷も David には見出すことができない。⁷ 確かに Dickens が味わった屈辱感や苦悩を表わしている部分は、作品の随所に見られる。次にあげる引用にみられる憤りの叫びなどはそのいい例である。

A child of excellent abilities, and with strong powers of observation, quick, eager, delicate, and soon hurt bodily or mentally, it seems wonderful to me that nobody should have made any sign in my behalf. (Chap. XI, p. 154)

しかしここに見られる激しさは、大人しく物静かな David に似つかわしくないのである。むしろ Dickens が自分の靴墨工場時代を振り返り、胸の内をさらけだした言葉と受け取る方が適当といえる。Dickens は、David の物語を書きながら、つい抑えきれずに自分の思いを書き綴ってしまったのだ。恐らく David という仮面を借りて、自分の感情のはけ口としたのであ

る。

Jerome Hamilton Buckley の指摘どおり David は Dickens の“counterpart”であって“double”ではない。⁸ David と Dickens は別の人生を歩んでいるのである。David に Dickens のような過去の傷を見出せなくてもおかしくはない。また David が Dickens の“favourite child”⁹ であったことも思い出す必要がある。溺愛する父親は「お気に入りの子」には、自分の夢を託すものである。自分には叶わなかったことを、その子に与えようとする親心に不思議はない。こうして Dickens は David の心に何の傷跡も残らぬようにし、彼の後の人生を満ち足りたものにしたと考えられるのである。

以上みてきたように、幸福な思い出も辛い思い出も、David の人格には影響を与えていないのである。彼は過去を振り返り、そこに戻りたいと願っている。しかし彼の心の故郷である思い出は、彼の精神的な生活面には意味のないものであった。つまり彼の過去は、物語の展開上の道具立て、あるいは背景にすぎないのである。過去と向き合い、最終的には過去を再現しその中に収まってしまう David だが、実際は過去から何も受け取らず無傷のまま時間を漂っているだけなのである。しかし過去の思い出が彼に何の影響も与えていないにもかかわらず、なぜ彼は思い出を辿り、未来を拒否するほどまで過去に執着したのだろうか。

6

David にとって自分の“Personal History”を書いた目的は、過去とのしがらみを自己に問いかけることではなかった。Stanley Friedman は、David の自伝は“effective therapy”¹⁰ の役割を果たしているとしている。しかしこれまで見てきたように、David は自分の成功物語を語ることで癒やされるほど屈折した心理を持ち合わせていないのだ。彼は自分の成功と幸福を素直に喜び、それに満足しているのである。同じ成功物語にしても *Hard Times* (1854) の Mr. Bounderby が繰り返し語る虚構の思い出の方が、“exact truth”（「ありのままの事実」）(Chap. XLIV, p. 646) を語っているとす David の自伝よりも余程興味深い。David の「事実」にはない歪曲した心理が、Bounderby の「作り話」には表われているからである。一体 David が過去を語る時、彼はそこに何を見出していたのだろうか。

Davidが過去の自分に愛着を抱いていたことは、彼の語る数々のエピソードから察することができる。彼は過去を振り返り、思い出を語ることによって自分自身を憐れみ、いとおしんでいたのである。三年間の外遊から戻り、Agnesに愛を打ち明け、彼女もまた彼を愛していたと知った日の夕べのことである。静かに幸福に浸っていた彼は、突然幼い自分の幻影を見る。それは“a ragged way-worn boy forsaken and neglected”(Chap. LXII, p. 863)といった姿の自分だった。幸福のただなかで哀れな自分の幻影を見たということは、強い自己愛の表われと受け取ることができる。人生でDavidが愛したのは、結局自分自身だけだったのである。

もちろんこれは極端な断定であり、われわれは彼が自分を取り巻く人々に対して愛情を抱いていたことを認めなければならない。しかし彼は自分を愛してくれる人たちだけを愛していたといえるのである。自分を都合のいい姿で映し出してくれる人たち、自分を善良で親切だと認めてくれる人たちがDavidの愛情の対象だったのである。

そのことがはっきり表われているのが、Agnesに寄せる彼の信頼と愛情であろう。彼が思い描くAgnesの姿は、片手で天を高く指しているのである。Agnesの側にいると彼は勞せずして善へと導いてもらえるのだ。彼女はあくまでも彼の“Good Angel”なのである。そして彼女の対極にいるのがHeepだといえる。DavidがHeepを嫌悪するのは、Heepによって映し出されている自分の姿が好ましいものでないからである。たとえばHeepはDavidに吐き棄てるように次のように言う。“You [David] were always a puppy with a proud stomach...”(Chap. LII, pp. 747-48) この言葉から、David自身の口からは聞くことのできないDavid像を見出すことができる。そればかりでなくわれわれは、HeepにDavidの特質が否定的な角度で描かれているのに気付くのである。Davidにあっては名声を勝ち得ようとする努力は、ひたむきさと考えられている。しかし同様の行為が、Heepでは成り上がり者の卑しさと捉えられているのだ。Davidにしてみれば、Heepの成功しようとする卑しい根性に自分の認めたくない一面を映し出されている気がしたに違いない。だからこそ彼はHeepを憎悪しているのである。

このように自分しか愛せぬDavidが過去へ戻っていかうとしたのは、自分に対する愛着のためにほかならなかったのである。自己を語ること、そして思い出を辿ることは、Davidにとっては自己を愛することを意味して

いたのだ。しかし他を受け入れることのできない彼の愛情が、不毛であることはいうまでもない。彼の愛が未来に向かって開かれることがないのは当然の結果である。またこの何も生み出さない自己愛のいきつく先が、実体のないものとして描かれている過去の幸福だったのも頷けるのである。

David Copperfield は、“a great fairy story” (chap. XIX, p. 273)だとよく評される。物語の展開や登場人物、そして現実離れをした雰囲気などは、確かに“fairy story”にふさわしい。David は、時間を越えて存在する“fairy story”の主人公ということができそうである。しかしわれわれは、David の終始変わらぬ性格の背後に、自己しか愛することのできない人間のエゴイスティックな一面が描き出されているのに気付かなければならない。善良な人物に描かれてはいるが、David には *Oliver Twist* の純粹さが見られないのだ。それどころか人間的ないやしきすら窺うことができるのである。

しかしここで見落とすことができないのは、David の人間臭さは、Dickens によって無意識のうちに創り出されたという点である。もし David の自己愛を責めるならば、その咎はむしろ Dickens にあるといえるだろう。前に述べたように Dickens が David に愛情を感じていたのは、David が自分の過去の思い出といくらか重なる部分を持っていたからである。David をいとおしむことは、Dickens が過去の自分を愛することに他ならない。つまり主人公に作者の過去を語らせるということは、間接的に作者が自己を語るということになるからである。Dickens 自身の自己愛が、無意識のうちに David に投影されているのである。

こうして自分を語るということが引き金となって Dickens は David という陰影を備えた人物を生み出した。David は単なるおとぎ話の主人公ではないのである。しかし彼はともすれば単調で退屈になりがちである。また不自然な人物として不満が残る。これは Dickens が、David と距離を置いていないことが原因なのである。David が自分に近い存在であるがために、David を描きながら作者として冷静な態度を忘れ、自分の感情に巻き込まれてしまうのである。

David は、Dickens が人間の複雑さを意識して創り上げた後期の作品群の登場人物たちとは異なっている。しかしその先駆をなすものと考えられる。

注

* 本稿は甲南英文学会第2回研究発表会（昭和61年5月31日、於甲南大学）における発表草稿に加筆訂正したものである。

- 1 John Forster, *The Life of Charles Dickens* (London: J. M. Dent & Sons LTD, 1948), Vol. I, Book I, chap. II, p. 20.
- 2 Barbara Hardy, *The Moral Art of Dickens* (1970; rep. London: Atholne Press, 1985), pp. 137-38.
- 3 Charles Dickens, *David Copperfield* (London: Oxford University Press, 1971), Chap. I, P. 1. 以下 *David Copperfield* からの引用はすべてこの版により本文に章と頁数を記す。
- 4 Angus Wilson, *The World Of Charles Dickens* (Harmondsworth: Penguin, 1972), p. 214.
- 5 Angus Wilson, "Charles Dickens: A Haunting," in *Dickens*, ed. A. E. Dyson (London: Macmillan, 1986), p. 36.
- 6 Barry Westburg, *The Confessional Fictions of Charles Dickens* (Illinois: Northern Illinois University Press, 1977), p. 165.
- 7 小池滋『ディケンズとともに』（晶文社, 1983）, pp. 60-61.
- 8 Jerome Hamilton Buckley, *Season of Youth* (Massachusetts: Harvard University Press, 1974), p. 33.
- 9 Charles Dickens, Preface to the Charles Dickens Edition, 1869.
- 10 Stanley Friedman, "Dickens' Mid-Victorian Theodicy: *David Copperfield*," in *Dickens Studies Annual*, VII, ed. R. B. Partlow, JR. (Illinois: Southern Illinois University Press, 1978), p. 146.

The Denial of Absolute Truth :
Henry James's *The Turn of the Screw*

Seiichi Nakai

SYNOPSIS

Whether the ghosts in *The Turn of the Screw* really exist or not has been the main issue in this novel's critical history. Yet, a thorough reading of the story in consideration of James's arts of the first person point of view reveals that the governess's statements are groundless and full of contradictions and that James has deliberately made the story read as a mere ghost story. Nevertheless, he never disclosed his own explanation of the story and entrusted the interpretation of it to the reader. These facts lead us to conclude that he had the attitude of seeing the world relatively—of the denial of absolute truth. James's real intention is to present to us *a* truth through the eyes of a young woman.

I

Henry James's *The Turn of the Screw* is a problem novel. It is because the work has been variously interpreted since the publication. On the whole the controversy is divided into two schools. Supported by Freudian theory, one takes the ground that the ghosts are nothing but hallucinations created by the governess's neurosis. The other takes the ground that the ghosts are real and described as evil, and the story itself is a Christian allegory, though there are some critics in the school who do not interpret it allegorically, such as Alexander Jones. Thus the

greatest issue of the controversy is whether the ghosts are really existent. As a matter of fact, it is not only impossible but also meaningless to interpret the work without giving any decision to the issue, for James's intention seems to be just at the point.

In this paper I try to reinterpret the work from the standpoint of the hallucination theory and prove that the ghosts belong only to the governess.

II

First of all, what we must keep in mind is that this story is of the heroine's own note and written in the first person. It is unthinkable to interpret this work without those facts. It seems that James makes the best use of the effect of the first person narration.

The first person is, of course, the point of view that the narrator himself appears in the story and narrates the happenings as one of the characters. It is an important principle that he, as limited to his own eyes, can not describe other characters' minds. But in trying to take the principle into consideration in actual interpretation of works, a problem will come about. It is how directly we should receive what the narrator says, judges and conjectures. The greater part of readers who are unaware of such arts of fiction, nay, even some critics who know them, are inclined to believe what the narrator relates as it is. Readers usually do it conventionally and automatically. Moreover it is also true that most writers describe their narrators' sayings all as reliable. For example, when the narrator conjectures a certain character's mind and says that he had doubt on it at the time, the description is taken as truth; that is, "he really had doubt on it," unless the conjecture is corrected by any utterance of misunderstanding. It may be because the most fundamental principle of the author-omniscience point of view found in myths and legends is deeply rooted in our spiritual function. Regarding, however, in real meaning—realistically—the principle of being unable to describe other characters' minds, the narrator's descrip-

tion in conjecturing another person's mind is not completely believable. Because the narrator himself is a human and can not always read others' minds correctly. Conversely speaking, in the first person narrative where all descriptions of conjecturing other characters' minds are taken as right, the narrator must be God.

James seems very conscious of such a principle of the first person point of view. We can say that in this regard he keeps his fundamental view of novel found in the phrase: "The only reason for the existence of a novel is that it does attempt to represent life."¹ To "represent life" may be interpreted here as the attitude of attaching the real human nature to the characters in the story. To his early works, such as *A Bundle of Letters* and *The Point of View*, the principle is already applied. Now I will take up the former to illustrate it.

Several Americans, Englishmen, Germans and Frenchmen are sojourning with their respective purpose under the same roof of a boarding house in Paris. The boarding house is also a kind of school for foreigners to learn French in. The situation there and their relationship and ways of thinking are brought to light by their letters. This novel is written in the form of letter which the first person is employed in, and by disclosing all the boarders' letters, as many points of view are given us. We can catch a glimpse of their real aspects by finding out discrepancies in their estimation and observation of others in their letters. Each letter shows his own world view and the experience of life he has had, but they are limited and full of misunderstandings. It is typically shown in the letters of Miranda Hope, a young and active girl, who has, to say in Jamesian way, American innocence, and who is traveling "to acquire the language and to see Europe"² for herself. She is hardly aware of other boarders' estimate of her, and her observations of them also are almost wide of the mark. For example, she takes a French man, who is in reality a flirt, for a refined gentleman. It is natural that we should not be able to believe Miranda, one of the narrators. We do not see in her letters the real aspects, but a world through the eyes of a woman, Miranda. It is clear that James is

conscious of the limit of recognition in the first person point of view.

What becomes another problem here is that, unlike *A Bundle of Letters*, the main part of *The Turn of the Screw* is made up of only the governess's note. It is impossible for us to use the way of comparing several points of view. We feel bewildered as if fronting one of Miranda's letters and ask ourselves if we can trust this "young, untried, nervous" (155)³ girl as a narrator. Besides, what is more complicated, she seems to be, in Oscar Cargill's phrase, a "pathological liar."⁴ As the Freudian critics point out, she is justifying herself unconsciously if not merely by sex-repression. However, unconscious lies are decisively different from conscious ones in that they clearly have contradictions caused by unconsciously distorting the reality. She skillfully narrates and rationalizes her words and deeds in some places, but in others she completely fails to do so. To be sure, James had a "marvelous understanding of human psychology"⁵ and spreads all over the story with surprising subtlety a network of foreshadows which suggests that her statements are inconsistent.

III

Deduced from James's principle of the first person point of view, the governess's narrative is a world through her eyes. It is her fantasy employing a reality of Bly as a frame. In this chapter I try to induce the principle by illustrating how the governess's words are filled with contradictions and distort the reality.

To begin with, I point out heroism, as the explanation of the governess's ghost-creation, which H. C. Goddard excellently mentions.⁶ She is a young, unexperienced and nervous girl from a country parson's family. Having known that she could not stand the strict conditions, the "serious duties" (155) and "really great loneliness" of her first job, she succumbed to the master's attraction and undertook it. She had fallen in love with him. Love for him and the serious duties give her a nervous breakdown. The unattainable love confines her emotion into

mind, and with her romantic disposition the hidden love takes shape of heroism. She wants the master to know her bravery and loyalty. Nothing happens in reality, so she fosters a story in her imagination. But she carries it in the real world unconsciously. The death of her predecessor, Miles's expulsion from school and slight knowledge of the existence of a vile man become a suggestion of the evil in Bly and some objectivity for realizing her inner story. That is, a hero and heroine are already set ; the villain is the rest to be required. What she needs is the situation in which she can play an active part as a heroine of self-sacrifice for the master. And she herself does not recognize it on the level of her consciousness.

The strongest motivation of the ghost-creation is the heroism. In the story can be found the descriptions which she herself gives :

I was in these days literally able to find a joy in the extraordinary flight of heroism the occasion demanded of me. I now saw that I had been asked for a service admirable and difficult ; and there would be a greatness in the right quarter ! — that I could succeed where many another girl might have failed. (199)

In her romantic imagination, nothing is more befitting to a dramatic heroine than she on the occasion. She is a "mistress" (159) of Bly, which is "a castle of romance inhabited by a rosy sprite" (163) ; she is here "to protect and defend the little creatures in the world the most bereaved and the most loveable" (199) for the master. Arriving at Bly, she is fascinated by the wonderful state in which she is placed. But next day she, after much thought, feels "a slight oppression" (162). However, the oppression is, in reality, anything but slight. It is shown by this sentence : "Regular lessons, in this agitation, certainly suffered some wrong. . ." (163). She expresses her anxiety : "I had the fancy of our being almost as lost as a handful of passengers in a great drifting ship. Well, I was strangely at the helm !" (164). Her mind is vacillating between the romantic fancy and the real anxiety. Miles's entrance gives impetus to her romanticism. He is "incredibly beautiful" (171),

and "everything but a sort of passion of tenderness for him was swept away by his presence." But then she says, "I was under a charm apparently. . ." (172). We should note her word "charm." The ambiguity is intended: she is attracted by his beauty but is also giving a foreshadow of the evil spirit's influence on him.

In such circumstances, the governess first sees a man on top of the tower. It is, as Wilson points out, when she is thinking of her master.⁷ She is taking a walk, thinking: "[I]t would be as charming as a charming story suddenly to meet some one. . . . I only asked that he should know. . ." (175). And just at the time her imagination "in a flash, turned real." Though it is not her master, a man is standing on the tower, she says. Yet, her statement only makes us doubt the actuality of the event. She relates that the man fixes her from the battlement "quite long" (177) and later he changes his place, "looking at me [her] hard all the while." "During this transit," she says, "he never took his eyes from me" (178). But, it is extremely unnatural that one can see the movement of the eyes of a person "through the fading light" in a distance "too far apart to call to each other." It is her own time that she was taking a walk, that is; "the hour when, for my pupils, tea-time and bed-time having come and gone" and "when. . . the day lingered and the last calls of the last birds sounded, in a flushed sky, from the old trees." Judging from these descriptions, it must be darker than she implies, by the words "the clear twilight" (176), that it is light around there. Nevertheless, she says with emphasis, "I saw him as I see the letters I form on this page. . ." (177). Such contradiction is disclosed when she later tells Mrs. Grose about the state of this affair. In answer to the question of when she saw him, the governess says, "At this same hour" (189). And when Mrs. Grose says, "Almost at dark," she answers in a flurry, "Oh no, not nearly. I saw him as I see you."

As Leon Edel argues that "[t]he young lady. . . always has an abundance of 'certitude,'"⁸ she emphasizes and certifies at all times. Such tendency is typically manifested when the governess sees the ghost of Quint in the dining-room and goes to the place where he was,

only to find nothing. She remarks, "He was there or was not there : not there if I didn't see him" (185). Where is such a certitude from? It is from her inner self which knows the ghost belongs to only her fantasy. Similarly, before her first sight of a female ghost by the lake, she says as if she already knew what she would see now: "There was no ambiguity. . . in the conviction I from one moment to another found myself forming as to what I should see straight before me. . ." (201). In short, in her fantasy the plot of the story is planned in that way. Therefore, she finally says, "I faced what I *had to face*" (202; emphasis added).

Here let us come to the scene where the governess first sees the female ghost. She sits down with a piece of work and Flora is playing alone before her. The governess begins "to take in with certitude and yet without direct vision the presence, a good way off, of a third person" (201). But she declares that it is absolutely not one of the men about the place. She waits wondering if Flora will see it and utter some cry, but nothing happens. Then the governess says :

I was determined by a sense that within a minute all spontaneous sounds from her had dropped, and. . . by the circumstance that also within the minute she had, in her play, turned her back to the water. (202)

She insists that "there is something more dire in this. . . than anything" she has to relate, because it shows to her that Flora is already aware of the presence of it. However, she, in reality, does not see that Flora "turned her back to the water." Notice what follows the quoted sentence, it reads: "This was her attitude when I at last looked at her. . ." The governess only imagines her movement. Her eloquence should mislead our sense of logic.

Flora's action of putting a stick into a hole in a flat piece of wood is, as Wilson indicates, a suggestion of sex repression, and reminds the governess of the relation between Quint and Jessel in her imagination. She knows that Quint was fond of "young and pretty" girls and "much

too free" (196), and surmises from Mrs. Grose's hesitating way of speaking that he had an intimate intercourse with her predecessor. Remember her statement after extracting the information on Quint from Mrs. Grose: "I myself had kept back nothing, but there was a word Mrs. Grose had kept back" (198). To be sure, she is remarkably keen of such a thing. And this fact indeed coincides with Wilson's theory that she is a "thwarted Anglo-Saxon spinster"⁹ and a person "shut out from love, condemned to peep at other people's activities and to speculate about them rather barrenly."¹⁰ The governess interprets Flora's play, which is really innocent, as an evil action by which Flora tries to suggest to her the intercourse between Quint and Jessel. She concludes that Flora must naturally have seen the woman, and exclaims to Mrs. Grose, "They [children] know—it's too monstrous: they know, they know!" (203) Later the governess emphasizes her keen intuition:

It seems to me indeed, in raking it all over, that by the time the morrow's sun was high I had restlessly read into the facts before us almost all the meaning they were to receive from subsequent and more cruel occurrences. (198)

However, in reality, what she has "read into" is nothing but a relationship between Quint and Jessel. The reader whose point of view has overlapped with hers is given, by help of plausibility of her interpretations, the impression that she has such a keen intuition that one can trust all her conjectures.

The governess's neurotic inclination has been gradually increasing since the affair at the lake. She begins to see the ghosts at night. Though she is now comforted with the extraordinary childish grace" (217) of the children, the grace is still, to her, "under the shadow of the possibility that it was studied" (218). She wonders if the children become aware of what she thinks "strange things about them" (217). And sometimes she embraces them tightly "by irresistible impulse." Although she feels their innocence, she is still suspicious of its being

beguilement. But then what has become of her certitude and that interpretation of Flora's insinuation? She hardly believes her own certitude. She feels what she thinks about them to be "strange." Her inner self knows that what she thinks is but a fantasy. But she will not bring it into consciousness. If she does, she has to admit that she is no more than a "poor protectress" (218) or "a bad governess" (219). She must be a heroine who will save the children to the last for her beloved. We can say that her dilemma at this point is between the inner need and the conscience. And it causes a serious neurosis. She wants to give herself to the imagination, but her ego which knows what she thinks to be only a fantasy prevents her doing so.¹¹ The reason why she always believes "absolutely" is not only that she tries to make her reader accept her interpretations, but also that she herself endeavors to believe her words. She thus requires objective facts for herself as well as for the reader. One of the most convincing is the proof that the children have contact with the ghosts at night.

One night, she has a faint sense "of there being something undefinably astir in the house" (221), goes out of the room and finds the figure of Quint under the stairs. Here, too, she is "fixed" by him "in the cold faint twilight" (222). But the passage was dark enough for her candle to make "little impression" (221). Besides "a glimmer in the high glass" is an only light given here when Quint appears. She seems to confront the ghost again in the very dark place. Coming back to the room, she finds Flora out of the bed. Though Flora excuses herself later, the governess says firmly, "I absolutely believed she lied. . ." (225).

On the eleventh night after that, she experienced the "sharpest shock" (227). Flora gets up again and peers out of the window into the night. The governess jumps at a conclusion: "She was face to face with the apparition we had met at the lake, and could now communicate with it as she had not then been able to do" (228). For the purpose of making sure of who it is that Flora is looking at, the governess steals out of the room, creeps into a downstairs room and looks out of the window. She finds Miles in the garden. Then the governess says:

[A] person [Miles] ... stood there motionless and as if fascinated, looking up to where I had appeared—looking, that is, not so much straight at me as at something that was apparently above me. There was clearly another person above me—there was a person on the tower.... (229)

Here she is clearly trying to remind the reader of the ghost of Quint she saw on the tower before. When Flora was peering out of the window, the governess suggested Flora's secret meeting with Jessel; but on finding that the suggestion was wrong and the person in the garden was not Jessel but Miles; she, this time, tries to relate Miles with Quint. At this point, strange to say, Flora's existence seems to disappear out of the governess's consciousness. Despite of having come to search for Flora's partner, she by no means makes an appropriate conjecture that a person at whom Miles is looking up may not be one on the tower but Flora upstairs. Rather, we can point out that she purposely chose the room which is located in the downstairs of Flora's room as well as in the lower part of the tower. By thus leaving the door open for doubt, the governess produces a mysterious atmosphere around the circumstances, at the same time makes herself believe in the ghost. Bringing Miles back into the house, she thinks this case as "a sharp trap" (232) for the boy; but immediately she comes in his room, she begins to think that he knows everything and has rather made her "in a cleft stick" (233). In answer to her question of why he did such a folly, Miles says that it is for the purpose of letting her think him bad "for a change" (234), and talks about the device of their mischief: "I arranged that with Flora." Having listened to his explanation, she says, "It was I who fell into the trap!" However, what "trap" in the world is there? There is only a childish mischief here. But she thinks that Miles has "given exactly the account of himself" as if he had the devil-like shrewdness. Note that her assertion of the children's communicating with the ghosts is entirely groundless; she only presses her interpretations on their normal actions.

Next day, she reports to Mrs. Grose that they are always in contact with the ghosts, but now Mrs. Grose begins to have a little doubt on her sayings and to feel anxious about her. It is directly shown in such an utterance as this: "Lord, you do change!" (236). In the eleventh chapter, her words to the governess are no more than questions and exclamation. It is not until the governess says that the ghosts will lure the children into death that Mrs. Grose seriously expresses her opinion: "Their uncle must do the prevention" (239). But she opposes the offer and imagines the master's response.

[H]is derision, his amusement, his contempt for the breakdown of my resignation at being left alone and for the fine machinery I had set in motion to attract his attention to my slighted charms. (240)

This description is taken up by some critics and employed as an effective proof of their hallucination theory. In short, she here raises her unconscious need up to the surface of consciousness. However, the most important part in this scene is rather the following utterance: "As I'm not a fiend, at any rate, I shouldn't take him in." If the children are really imperiled, it will be the right measure, as Mrs. Grose says, to call for the master. But the governess states that she shouldn't take him in. The words reveal that she herself admits what she narrates to be false. She is not aware of the contradiction, at least, on the level of consciousness. However, hearing it, Mrs. Grose is pursued by uneasiness and grasps the governess's arm, saying, "Make him at any rate come to you" (239). It is clear that Mrs. Grose should not believe her "absolutely."

The drama proceeds to the climax. To use her words, "the catastrophe was precipitated" (249). It begins when Miles says on the way to church on a Sunday morning, "[W]hen in the world, please, am I going back to school?" She calls the utterance "a revolution." Yes, it is just a revolution to her. Here she already loves him. She has found in the relationship with Miles a substitute for the unsatisfied love for the

master. Later she tells Miles that he has never referred to the subject of school. But as a matter of fact the reason why he has not is that she has never mentioned of it. She did not want to bring it into conversation. If she had done so, Miles might have been moved by craving for school—friends and for seeing “more life” (251) and have left her. She was afraid of that. She once said, “I was content for the time not to open the question [of school], and that contentment must have sprung from the sense of his perpetually striking show of cleverness” (219). She wants to keep him at hand. So, once attacked by his revolution, she is badly agitated. She remarks, “The whole thing was virtually out between us” (250). Though agreeing with Miles who wants to be “getting on,” she exclaims, “Oh, but I felt helpless!” Miles is just stating his frank feelings humanly, besides he is kind enough to care about her by saying, “Ah, of course she’s a jolly ‘perfect’ lady. . . .” But she can not but think that he is playing with her feeling as if he had the cruelty given by the evil spirits.

When Miles tells her that he will call for his uncle to ask him to go back to school, her shock attains the peak. She herself knows it a solution which she really desires to bring on, but she can not break the promise with the master. “[N]o one knew—how proud I had been to serve him and to stick to our terms. . .” (240). She is here placed in a dilemma between the desire to meet the master and the wish to fulfill their terms. Put in a great quandary, she tries to get away from the house. When coming into the classroom to take her belongings, she sees Jessel again. Then the governess finds in her appearance “her haggard beauty and her unutterable woe” (257). The ghost can be, however, regarded as a shadow of her own. She describes the state of things on that occasion.

Seated at my own table in the clear noonday light I saw a person whom, without my previous experience, I should have taken at the first blush for some housemaid who might have stayed at home to look after the place and who, availing

herself of rare relief from observation and of the schoolroom table and my pens, ink and paper, had applied herself to the considerable effort of a letter to her sweet heart. There was an effort in the way that, while her arms rested on the table, her hands, with evident weariness, supported her head. . . . (256-257)

This figure overlapped with that of the governess who desires to write to her imaginary sweetheart, the master, but knows it impossible. The governess cries to the figure, "You terrible miserable woman!" disappears, and she feels that she must stay.

She has determined to make the last bet at this time. It is to translate her fantasy into reality willy-nilly. She has found there was absolutely no way out of the situation. If left to himself, Miles will call for his uncle and ask him to return to school. It means not only the bankruptcy of her relationship with the master but also the loss of Miles. To prevent him from doing so, she announces to Mrs. Grose and Miles that she herself will write to the master. But it is later revealed, by Miles's reading her letter surreptitiously and finding that nothing is written, that her announcement is nothing but a makeshift.

That night she goes out of her room with "endless obsession" (262) to Miles's room, where they talk about his school. She feels him to be "some wistful patient in a children's hospital" (263) and says, "I would have given. . . all I possessed on earth really to be the nurse or the sister of charity who might have helped to cure him." Her heroism focuses on Miles, at least, here. She seems to be going to make up, as it were, a love drama with him. She treats him as if he were "an older person," "an intelligent equal" (264). Embracing and kissing him, she is asked to let him alone and flinches. But she justifies herself by saying, "I felt that merely, at this, to turn my back on him was to abandon or, to put it more truly, lose him" (266). Now nothing is more dreadful for her than to "lose him."

Next day, the governess is asked by Miles to listen to his piano play

after lunch. During the play Flora goes somewhere. Though Mrs. Grose and she look for Flora in the house, she is nowhere to be found. The governess declares that Flora has gone out and says, "She's *with* her" (271). And later Flora is found by the lake as she said. The governess insists that Miles has distracted her attention from Flora in the "infernal" way ; that is, by having her fascinated by his piano play. However, considering the situation carefully, we find that the governess so left her alone that Flora went there. "I've always been sure she wanted to go back alone" (274). Judging from this statement of the governess, Flora seems to be fond of playing by the lake. The governess must have thought that if she pretends to be fascinated by Miles's piano play and leaves Flora alone, she is sure to go to play alone by the lake. "He . . . played as he had never played. . ." (269), says the governess about Miles's piano play. But there is no doubt that she was not much attracted by his play, if we become aware of her cool observation in the following words: "[I]f there are those who think he had better have been kicking a football I can only say that I wholly agree with them." Then why did she get Flora to go to the lake? It is because the governess tries to acquire the supreme objective proof—the witness of others, here, of Mrs. Grose—in order to make the last bet ; that is, her forcing realization of the fantasy. She has arranged the stage for the purpose. Here the governess is wholly giving herself to the fantasy.

First she regains Mrs. Grose's confidence and relief by announcing that she will call for the master. Next, she lets Flora go to the lake and hints Mrs. Grose that Flora has gone to see Jessel. Though Mrs. Grose can not still believe it, she is pursued by uneasiness because Flora is not to be found. To her mind may have occurred the utterance the governess has said before that the ghosts can "destroy them" (238). Not knowing what to do, Mrs. Grose follows her. And they find Flora playing alone by the lake as the governess "predicted." Mrs. Grose's confidence may be now at the zenith. The governess should not lose this chance. At the time the governess sees Jessel again.

I remember, strangely, as the first feeling now produced in me, my thrill of joy at having brought on a proof. She was there, so I was justified; she was there, so I was neither cruel nor mad. She was there *for poor scared Mrs. Grose...* (278; emphasis added)

However, naturally, her fantasy is no more than that and must collapse before reality. She is to receive Mrs. Grose's reply: "What a dreadful turn, to be sure, Miss! Where on earth do you see anything?" (280). The governess still tries to acquire her testimony.

"You don't see her exactly as we see?—you mean to say you don't now—now? She's as big as a blazing fire! Only look, dearest woman, look—!"

In this cry we can hear a pathetic tone of the governess who wishes for the objectivity for her story and wants to make her heroism public. Here her neurosis has come up to fair degree. After all, Mrs. Grose can see nothing. The governess feels her situation "horribly crumble." She has lost the last bet.

Flora cries with fear, and Mrs. Grose takes her back to the house. Having lay there and wailed, she also comes back home. On the way, she finds that the boat for crossing the lake is gone, and remarks, "I had a fresh reflexion to make on Flora's extraordinary command of the situation" (283). But we, who already know that Flora was taken away by Mrs. Grose, can be aware that the governess has lost her normal judgement. In the house she finds that Flora's belongings have been already transferred out of her room. "[I]n spite. . . of the deeper depths of consternation. . .," she strangely says at this time, "there was literally, in the ebbing actual, an extraordinarily sweet sadness." Why "extraordinarily sweet"? It is not that she has mounted to the height of insanity. To be sure, she lost her bet, and her ego is considerably hit but has not broken down. It has not lost its reality principle yet, though almost under the control of pleasure principle.¹² And the object of her

need, by failure of the bet, which is just the breakdown of the love drama with her master, now converges into a single point—Miles.

I saw neither of them [Flora and Mrs. Grose] on my return, but on the other hand I saw, as by an ambiguous compensation, a great deal of Miles. I saw—I can use no other phrase—so much of him that it fairly measured more than it had ever measured. (283)

She failed to get the objectivity of her story, but on the other hand she obtained a possibility of sending Flora and Mrs. Grose away from her, more correctly, her and Miles. Just at the time she feels “an extraordinarily sweet sadness.”

That night, when she is immersed in thought, Miles comes in and takes a seat by her silently. Though she, reading his mind, states that he wanted to be with her, it is rather the projection of her own feeling. Next morning, Mrs. Grose comes in her room and tells her that Flora is sick in bed, with saying that she never wants to see the governess. As the result of reflections the governess says to Mrs. Grose firmly, “It’s you who must go. You must take Flora” (287).

“Away from here. Away from them. Away, even most of all, now, from me. Straight to her uncle.”

“Only to tell on you—?”

“No, not ‘only’! To leave me, in addition, with my remedy.” . . . “And what is your remedy?”

“Your loyalty, to begin with. And then Miles’s.”

If I show what she really means in this scene by using her words, it will be like this: Most of all, you must take Flora away from me and leave me with my remedy, Miles. “Get off with his sister,” at last she says, “as soon as possible and leave me with him alone.” What she desires is now clear. Thus she tries to realize her dream of heroism, in the situation of her being with Miles alone. Having driven the nuisance for her fantasy, she becomes “very grand and very dry” (293) as a heroine.

Now she is no "poor protectress" but the "mistress" of Bly completely.

To mark, for the house, the high state I cultivated I decreed that my meals with the boy should be served, as we called it, downstairs ; so that I had been awaiting him in the ponderous pomp of the room. . . . (295)

When the maid is serving before her and Miles, the governess describes her feeling as follows :

We continued silent while the maid was with us—as silent, it whimsically occurred to me, as some young couple who, on their wedding-journey, at the inn, feel shy in the presence of the waiter. (297)

This is the passage that Wilson also quoted, and it is convincing that the indication of the governess's love for Miles is, seen from this context, anything but erratic.

The conditions are all set ; she proceeds to the "catastrophe." Now her mind is almost overwhelmed by the unconscious need. The governess anticipates that Flora will go to see her uncle and give him to know that the governess is "the lowest creature" (286). She also understands that their terms and reliant relation will be broken and she will completely lose the original object of her heroism. So, now her ego is in collusion with her need. The fundamental role of the ego dispassionately watching the reality is now working for her need. However, the conscious is still functioning somehow. When she asks Miles if he really wants to go out of Bly and Miles answers "Awfully" (301), she remarks, "I was just nearly reaching port, a perverse horror of what I was doing." But it has no effect of hindering the need any more. The fear of losing her fantasy and object of heroism has forced her neurosis to advance to the irretrievable extent.

The governess again questions Miles about the reason for his expulsion from school. He obediently confesses that it is because he said "things," which should not have been said, to a few friends. Then

“the appalling alarm of his being perhaps innocent” (307) comes to her. She continues, “[I]f he *were* innocent what then on earth was I?” This is the last intervention of her conscience. She asks him what the “things” he said to his friends were. Just at the time the governess sees Quint again. She cries, “No more, no more, no more!” (308). Though the utterance is described as being given to Quint, it is, in fact, to Miles. She does not want to hear his answer, because her conscience knows that he is innocent. Here she suppresses her conscience to perfection and gives herself to her need wholly. Miles mentions the name of Quint at this time. She concludes that it is exactly his “surrender,” and exclaims, “What does he matter now, my own? — what will he ever matter? *I have you. . .*” (309). She hugs him, but after a while she finds his little heart stopped. Wilson holds that Miles has been literally frightened to death by the governess.¹³ Yet, it is, to be sure, unnatural, as Jones points out, that a child should die because somebody points out the existence of the ghost.¹⁴ But she here remarks: “I caught him, I held him — it may be imagined *with what a passion. . .*” (emphasis added). Judging from this description, it can be taken that the governess smothered him. She wants to have him to herself; she hugged him with full strength and suffocated him to death. Thus the “catastrophe” is over.

By thus examining the story in detail, we can see how the governess’s statement is filled with contradictions, and that her conjectures and interpretations of other characters’ sayings and doings are not backed by any facts at all. Clearly, James has constructed this story with marvelous ingenuity.

VI

James has not given any clear explanation of the work in his comments on it and in the refutations to critics. It seems that he has deliberately avoided doing so and left it ambiguous. That attitude is directly shown in the following comment on the work :

Only make the reader's general vision of evil intense enough. . . , and his own experience, his own imagination, his own sympathy (with the children) and horror (of their false friends) will supply him quite sufficiently with all the particulars. Make him think the evil, make him think it for himself. . . .¹⁵

We can say that he has entrusted the interpretation of the story to the reader. This work is clearly, as I have mentioned, not a mere ghost story but the governess's psychological drama. Nevertheless, I must say that James designed it to be taken, when ordinarily read, as a ghost story. Therefore the work has brought about so many interpretations. Then what the intentional duality of the story shows? As a significant key to the question, the moral problem can be taken up. For example, the sexual suggestion of Flora's playing with some pieces of wood by the lake is not accidental but sufficiently calculated, as I stated in the last chapter. However, if it had been made public in the Victorian society of the day, he would have surely taken great reaction. Moreover, the governess has driven the child to death according to the hidden love and her own need. People in those days can not have admitted such human psychology in public. But James could confront and admit the complexity and wonder of human psychology and desires behind the Victorian mask. If they are parts of human nature, it is the "freedom of choice"¹⁶ for the novelist to take up them as a theme of his work. Criticizing the state of his contemporary novels, James remarks: "There is the great difference. . . between what they talk of in conversation and what they talk of in print. The essence of moral energy is to survey the whole field. . . ." ¹⁷ "There are certain things," he continues, saying, "which it is generally agreed not to discuss, not even to mention, before young people. That is very well, but the absence of discussion is not a symptom of the moral passion." By choosing this theme, as the novelist who has "freedom," and offering it in the form of work, we can say, James has tried to "survey the whole field" with "the moral

passion." And he takes the freedom of the reader into consideration as well. It is just the way of giving the interpretation into the hands of the reader. His purpose can be achieved only when the most attentive readers are able to open the massive door of James's concealment and to read his real story.

However the problem does not stop here. When his art of the first person point of view adds to those matters; the freedom of the novel, the freedom of interpretation and the duality of the story, we can be aware that all of them are pointing in a single direction—relativity of the world. That leads me to the conviction that James had attitude of denial of absolute truth. We can see the world only through a filter of our own. If the filter is soiled, the distortion of the real life will come about. All we can do is to make the distortion flatter as much as possible by our intentional effort. However if we can not realize the distortion on our consciousness and are controlled by the dark power of unconsciousness, how can we know the reality? The governess's case is an exquisite example of it. And James seems not necessarily to blame her. He knew that man has, more or less, some distortion on his filter and sees the world respectively differently. Good experiences may help us prevent the distortion to some degree, but "[e]xperience is never limited, and it is never complete..."¹⁸ Her case is nothing but an extreme, though not allowable, but understandable one. Therefore he makes Douglas say, "she was a most charming person, ... a most agreeable woman. . ." (149). He must have thought that her story is not a false, but a truth to herself. When an accident happens, no one can obtain the absolute truth about it however one seeks after it. Every witness talks from his own point of view, and the accumulation of it makes us take a glance at what seems to be the truth. Yet, it is not the absolute truth, but what seems to be that. James seems to tell us that truth has some levels and we can not take hold of complete, absolute truth. The real horror of this story may be said to be the horror of inpalpable truth.

Notes

- 1 Henry James, "The Art of Fiction," in *Theory of Fiction: Henry James*, ed. James E. Miller, Jr. (University of Nebraska Press, 1972), p. 30.
- 2 Henry James, *A Bundle of Letters*, vol. XIV of *The Novels and Tales of Henry James* (New York: Charles Scribner's Sons, 1936), p. 482; hereafter cited as New York Edition.
- 3 *The Turn of the Screw*, vol. XII of New York Edition, p. 115. All page references designated by Arabic number are to this edition. The citations from the same page as the previous ones do not have page references.
- 4 Oscar Cargill, "Henry James as Freudian Pioneer," in *A Casebook on Henry James's "The Turn of the Screw,"* ed. Gerald Willen (New York: Thomas Y. Crowell Co., 1967), p. 228; hereafter cited as *A Casebook*.
- 5 Cargill, p. 227.
- 6 Harold C. Goddard, "A Pre-Freudian Reading of *The Turn of the Screw*," in *Henry James: "The Turn of the Screw": An Authoritative Text and Background and Sources: Essays in Criticism*, ed. Robert Kimbrough (New York: W. W. Norton & Co., 1966), p. 223; hereafter cited as *Essays*.
- 7 Edmund Wilson, "The Ambiguity of Henry James," in *A Casebook*, p. 116.
- 8 Leon Edel, "The Point of View," in *Essays*, p. 231.
- 9 Wilson, p. 121. He concludes at the end of the interpretation of the story that "it is a variation on one of his [James's] familiar themes: the thwarted Anglo-Saxon spinster; we remember unmistakable cases of women in James's fiction who deceive themselves and others about the origins of their aims and emotions."
- 10 Wilson, p. 126.
- 11 I have partly adopted Freud's theory in the interpretation. But I should say that if we have keen observation enough to be aware of her contradictions, the theory is, of course, needless for us to interpret this story. It must not be forgotten that this is only a help by which we can more easily get the meaning of the story. The following explanations of the terms are my reproductions of the translator's explanations of *A Primer of Freudian Psychology* by Calvin S. Hall, trans. Yoshio Nishikawa (Shimizu Kobundo Co., 1981).

Ego: One of the three main systems that constructs the personality along with the id and the super ego. It differentiates from the id in childhood and is conscious or pre-conscious. It is also logical and works for subordinating the instinct power to the reality of the external world and controlling the super

ego ; it works, in other word, along the reality principle.

Id : The source of psychic energy and the seat of instinct. Seated in the depth of the psyche, it is driven by the pleasure principle which wishes for pleasure and avoids displeasure. It is unconscious, illogical and amoral. In this story the governess's inner need is from the id.

Super Ego : It imposes inhibitions and ideals upon the ego. If the ego disobeys them, it causes remorse or shame or fear. It is made by accepting inhibitions and ideals from the adult, especially, the parents. In this story the governess's conscience and remorse are from the super ego.

- 12 See the note 11.
- 13 Wilson, p. 120.
- 14 Alexander E. Jones, "Point of View in *The Turn of the Screw*," in *A Casebook*, p. 317.
- 15 Henry James, "Preface" to *The Aspern Papers*, vol. XII of New York Edition, p. xxi.
- 16 James, "The Art of Fiction," p. 38.
- 17 "Art," p. 43. The next quotation is from the same page.
- 18 "Art," pp. 34—35.

Bibliography

- Andreas, Osborn. *Henry James and Expanding Horizon*. New York : Greenwood Press, 1969.
- Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition*. The Johns Hopkins University Press, 1980.
- Hall, Calvin S. *A Primer of Freudian Psychology*. trans. Yoshio Nishikawa, Shimizu Kobundo Co., 1981.
- James, Henry. *A Bundle of Letters*. vol. XIV of *The Novels and Tales of Henry James*. New York : Charles Scribner's Sons, 1936.
- . *The Turn of The Screw*. vol. XII of *The Novels and Tales of Henry James*. New York : Charles Scribner's Sons, 1936.
- Kimbrough, Robert, ed. *Henry James : "The Turn of the Screw" : An Authoritative Text and Backgrounds and Sources : Essays in Criticism*. New York : W. W. Norton & Co., 1966.
- Miller, James E., Jr., ed. *Theory of Fiction : Henry James*. University of Nebraska Press, 1972.

Mullahy, Patrick. *Oedipus : Myth and Complex : A Review of Psycho-analytic Theory*. New York : Grove Press 1955.

Willen, Gerald, ed. *A Casebook on Henry James's "The Turn of the Screw."* New York : Thomas Y. Corowell Co., 1967.

Elsewhere Condition について

岩 永 美 津

SYNOPSIS

According to the Elsewhere Condition, if two rules which perform incompatible changes compete for the same structural descriptions, the more specific rule takes applicational precedence over the less specific one. This principle is attributed a significant morphological and phonological function in the model of Lexical Phonology and Morphology proposed by Kiparsky (1982a, 1982b). In this paper, I investigate the claims concerning the Elsewhere Condition and argue that this principle cannot be considered to be satisfactory in both phonology and morphology. Furthermore, I show that the Strict Cycle Condition is a more valid constraint on the application of phonological rules and that the theory of Lexical Phonology and Morphology makes the morphological EC redundant. I conclude that the need for this principle as an independent principle can be eliminated.

0. はじめに

Kiparsky (1982a, 1982b) によって提唱されている語彙音韻論形態論 (Lexical Phonology and Morphology, 以下 LPM と略す) の枠組みでは、音韻論上、形態論上の問題を解決する手だてとして非該当条件 (Elsewhere Condition, 以下 EC と略す) が提案されている。本稿では、EC は LPM の理論的枠組み内で妥当な制約であるか否かについて検討し、EC に訴えることなく音韻的現象と形態的現象がいかにして説明されるかを明らかにし

たい。

第1章では、まず、簡単に EC を用いた Kiparsky の分析を紹介し、第2章では、その分析の問題点を指摘する。第3章では、EC で処理されるあるいは処理しきれない形態操作の過程は、特別の手段を設定する必要もなく LPM の理論的枠組みで十分に説明されることを論じる。さらに、語彙部門の音韻規則の制約としては、Halle & Mohanan (1985) で提案された厳密循環の条件 (Strict Cycle Condition, 以下 SCC と略す) の方が、従来のものより妥当であるということも、併せて示したい。

1. Kiparsky (1982a, 1982b) の分析

1. 1 EC と同定規則 (Identity Rule)

EC は、適用範囲の狭い規則は適用範囲の広い規則よりも先に適用され、関係する規則は離接的に順序付けられるという効果をもつ。

(1) EC

文法の同一部門の中に二つの規則 A, B があり、次のような条件が満たされる場合に、またその時に限り、これらの二つの規則はある形式 ϕ に対して離接的に順序付けられて適用される。

- i) A (特殊な規則) の構造記述が B (一般的な規則) の構造記述を真に包含する。
- ii) A を ϕ に適用した結果が、B を適用した結果と相異なる。
これらの条件が満たされる時に A が先に適用され、その結果何らかの効果が生じる場合には B は適用されない。

(Kiparsky (1982a, p. 136 ; 1982b, p. 8))

さらに、EC の働きは、各々の語彙項目エントリーが、構造記述と構造変化とが同一である同定規則の役割を担うという仮定と結びつけられている。語彙項目エントリーを成すのは、単一形態素でできたもの(例 *nightingale*) と語彙部門のすべてのレベルの出力(例 *sanity* (レベル1)) である。¹前者は基本的語彙項目エントリー、後者は派生語彙項目エントリーと呼ばれている。

次に、EC と同定規則を用いた Kiparsky の分析を概観していくことにする。

1.2 形態論における EC

形態論の分野で、EC は、阻止現象を処理したり同じ機能を持つ接辞が積み重ねられて付加されるのを排除する。

まず、阻止現象について見てゆきたい。阻止現象というのは、語形成規則により新しく語を作ろうとした場合に、すでに存在している同義又は同音の語が、その新語が作られるのを阻止するという現象である。² 例えば、次の(2)

(2) 動詞	名詞	名詞
<i>guide</i>	<i>guide</i>	* <i>guider</i>
<i>spy</i>	<i>spy</i>	* <i>spier</i>

のような例に関与する語形成規則は、次の二つである。

- (3) a. insert ϕ / [[X] v _____] Noun, Agent
 Where X = *guide, spy, ...*
 b. insert [er] / [[] v _____] Noun, Agent

(3a) は (3b) の特殊な場合で、二つの規則の環境は、(3a) が特別な動詞に制限されているという点を除けば一致している。さらに、両方の規則の出力は、相異なる。それゆえ、EC により (3a) だけが適用され、(2) の例の適格形と不適格形が説明されるのである。

次に、同じ機能を持つ接辞が積み重ねられた **oxens* のような不適格形が、いかにして排除されるか見てゆく。まず、レベル 1 で、特殊な *en*-複数規則により *oxen* が派生される。各々のレベルの出力は、派生語彙項目エントリとなり、これは、同定規則としても作用する。従って、レベル 3 で、(4) のような派生がなされることになる。

- (4) a. Rule A: [*oxen*] [+Noun, +Plural] (Identity Rule)
 Rule B: Insert /z/ in env. [X _____] [Noun, +Plural]
 b. input: [*oxen*] [+Noun, +Plural]
 Rule A: [*oxen*] [Noun, +Plural]
 Rule B: blocked by the EC
 output: [*oxen*] [+Noun, +Plural]

同定規則 A の構造記述は、一般的な複数規則 B の構造記述を真に包含し、

出力が異なるので、ECにより A だけが適用されて B の適用は阻止され、*oxens のような場合が適格でないということが説明される。

1.3 音韻論での EC

音韻論の分野の EC は SCC との関連で議論されている。SCC とは、循環的に適用される音韻規則は、派生された環境で適用されるということ述べているものである。例えば、Mascaró(1976) は、(5)のような SCC を提案している。

(5) SCC

- a. 循環的規則は、派生された表示にのみ適用される。
- b. 定義：表示 ϕ が、サイクル j で導入された形態素の結合、あるいは、サイクル j での音韻規則の適用によって規則 R の構造分析を満たす場合に、またその時に限って、サイクル j において、 ϕ は規則 R について派生された表示となる。

(Kiparsky (1982a, p. 154 ; 1982b, p. 31)による)

Kiparsky は、この SCC によってもたらされる効果は、同定規則と関連づけられたより一般的原理である EC により派生されるので、SCC は、余剰的なものとなり仮定される必要はないとしている。Kiparsky のこの主張を SCC との関係でよく用いられる有名な例 *nightingale* を用いて説明する。この語は、3 音節弛み母音化規則 (Trisyllabic Shortening Rule, 以下 TSR と略す) の構造記述を満たしているが、TSR は、適用されない。*nightingale* は、派生された表示であるとは言えないので、SCC によって、循環規則 TSR がこの語に適用されるのが阻止される。一方、Kiparsky の分析では、この例は、レベル 1 で次の二つの規則が適用されると考えられる。

(6) a. /nītVngæɪ/ (Identity Rule)

b. Trisyllabic Shortening Rule

$V \rightarrow [-\text{long}] / \text{---}C_0V_iC_0V_i$

where V_i is not metrically strong

EC は、これら二つの規則のうち、(6a) の適用を可能にし、(6b) の適用を阻止するのである。

次に *nightingale* と異なり、TSR が適用できる場合を考えてみる。例えば、*sanity* は、*sane* に *-ity* が付加された派生語であるので、TSR の適用は SCC によって阻止されない。Kiparsky の分析でもこの例はきれいに説明される。つまり、レベル1で TSR が適用される段階で、[[*sæn*] *iti*] という形は、レベル1の出力ではないため、それは派生語彙項目エントリーにはならない。それゆえ、TSR と離接的關係となるような [*sæniti*] → [*sæniti*] という同定規則は存在しないことになり、TSR はこの場合適用される。

このように、EC と同定規則により、*nightingale* と *sanity* の対照は、うまく処理されるので、もし SCC を仮定したとしたら、それはまったく余剰的なものになるといえよう。上記の例だけを見れば、Kiparsky の主張は、妥当なように思えるが、彼の思惑どおりに事が運ばない場合もある。2.1において、語彙後音韻規則 (Postlexical Phonological Rule) を例に取り挙げて、Kiparsky の主張の問題点を考察することにする。

2. EC の問題

2.1 EC と SCC

LPM の理論によれば、音韻規則は、語彙規則 (Lexical Rule, 以下 LR と略す) と語彙後規則 (Postlexical Rule, 以下 PR と略す) の二つのタイプに区別される。LR は、語彙部門の各々のレベルで適用されるもので、PR は、統語論の出力に適用されるものである。LR は、語彙部門の特定のレベルでの語形成規則が適用されるたびに、繰り返し適用できるので、固有に循環的なものであるということになる。一方、PR は、固有に非循環的に適用される。理由としては、次の二つがある。一つは、形態的操作の過程で生じた構造を示す内部括弧は、角括弧削除規約 (Bracket Erasure Convention, 以下 BEC と略す) によりレベルの終わりで削除されてしまうという理由で、もう一つは、語彙後形態操作がないという理由である。それゆえ、PR は、繰り込み構造 (nested structure) を利用できないため、非循環的に適用されるのである。³

PR のこのような特徴によって、循環的音韻規則の適用だけを支配する SCC の制約を PR は受けられないことになる。つまり、SCC を仮定している LPM の枠組みでは、その理論的帰結に基づいて、PR は、その構造記述を満たしているすべてのものに適用されるのである。一方、Kiparsky で提

案されている EC は、(1)から明らかなように、循環規則だけを規制しているわけではないから、何らかの手だてを施さない限り、誤って PR の適用を阻止してしまうという問題がある。Kiparsky で PR として見なされている軟口蓋音軟化規則 (Velar Softening Rule) を例に取り挙げてこの問題を考察することにする。

(7) Velar Softening Rule

$$\begin{array}{l} /k/ \rightarrow /s/ \\ /g/ \rightarrow /j/ \end{array} \quad \left[\begin{array}{l} \text{---back} \\ \text{---low} \end{array} \right]$$

(8) *criticism* *medicine* b. *rigid* *analogize*

(8)における太字体は、基底表示では (8a) の場合/k/として、(8b) は、/g/として各々表わされている。(7)は、基底での/k/, /g/を各々/s/, /j/に変える。しかしながら、Kiparsky の EC は、(7)が(8)に適用されるのを阻止してしまうのである。例えば、レベル2の出力である/critikizm/は、語彙項目エントリーとなり、同定規則の役割も担うことができる。同定規則というのは、語彙項目エントリーを規則として見なすものであり、語彙後レベルでこの規則が語彙項目エントリーに適用されるのを阻止するものは何もない。従って、このレベルで/critikizm/には次の二つの規則が適用される。

(9) a. /critikizm/ (Identity Rule)

b. Velar Softening Rule

EC は、特殊な規則 (9a) を適用範囲の広い (9b) より先に適用させ、(9b) の適用を阻止するので、適格でない/critikizm/が与えられることになる。

このように、Kiparsky の EC は、PR の適用を不可能にしてしまうという望ましくない効果を持っている。それゆえ、なぜ LR だけが同定規則と隣接的に順序づけられ、PR については、合接的になるかということを説明するために PR は EC に支配されていないという特別な仮定が必要となってくる。あるいは、PR の適用を可能にするために、語彙項目エントリーは後段語彙レベルでは、同定規則の役割を担わないと述べる必要がある。⁴

このように見てくると、LR と PR の適用の違いを適切に促している SCC の効果を、そのまま、より一般的な EC の効果から派生させるには、少し無理があるように思える。それゆえ、Kiparsky の主張は、当を得たも

のとは言えない。Mohanani (1984) や Halle & Mohanani (1985) の LPM の枠組みでも仮定されているように、特別の仮定を必要としない SCC の方が、LPM の理論の段階において望ましいと言ってよいだろう。

2.2 韻律構造の変更

Kiparsky は、EC と音韻規則との関係について、Hayes (1980, 1982) で提案された英語の韻脚構築の主な規則である英語強勢規則 (English Stress Rule, 以下 ESR と略す) と強左方移動規則 (Strong Retraction Rule, 以下 SRR と略す) の適用は、EC によって制約されるとしている。本節では、この主張の妥当性を検討することにする。

Hayes は、ESR と SRR が以前のサイクルで構築された韻律構造を変えることができるか否かに関して各々に異なる資格を与えている。つまり、ESR は、語の右端でライム投射 (Rime Projection) が枝分れしているかどうかに基づいて、最大限に二項的な SW 韻脚を付与し、以前のサイクルで構築された韻律構造を変えることができる。一方、SRR は、右から左へ韻脚が構築されていない記号列に、最大限に二項的な SW 韻脚を繰り返して付与できるが、この場合、ESR とは異なり、ライム投射に影響されず、また入力 of 韻律構造を削除し、変更することはできない。

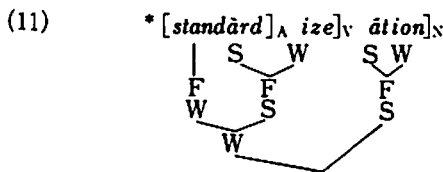
Kiparsky は、ESR と SRR のこのような特徴は EC により説明されるとしている。しかし、Kiparsky が与えている分析にはかなりの問題がある。例として *standardization* の派生を考える。Kiparsky の説明によれば、レベル 1 での最後のサイクルで、*-ation* に ESR が適用され (10) のような韻律構造が派生される。



以前のサイクルで韻律構造を与えられた *-ation* の左側の記号列は、*-ize* の付加により派生された語彙項目エントリーであるので、同定規則と見なされる。従って、EC により同定規則が適用され、SRR は適用されなくなり、以前のサイクルで派生された韻律構造は、そのまま保持されるのである。

Kiparsky の提案は、議論としてはきれいであるが、派生語彙項目エント

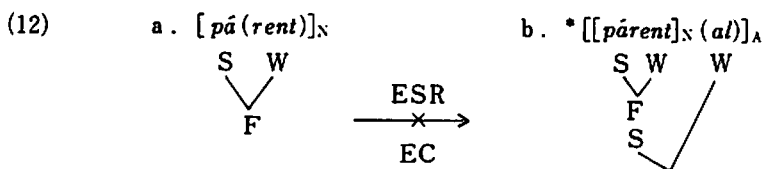
リーというのはどういうものかということが曖昧であるので、説得力はいま一つと言わざるをえない。何度も述べたように、Kiparsky は、レベルの出力を派生語彙項目エントリーと見なし、このことは重要な帰結をもたらすとしているが、*standardization* の議論に限って、サイクルの出力を派生語彙項目エントリーと見なして、*standardize* の内的括弧を削除している。それゆえ、派生語彙項目エントリーの資格に関して一貫性を欠いていると言える。もし、前者の立場を維持するとすれば、(11)のような不適格な韻律構造が派生されるだろう。



もし、*-ation* の付加がレベル 2 でなされるのなら、レベル 1 の出力である *standardize* は、派生語彙項目エントリーになり得るが、*-ation* は、強勢の付与に影響を与える接辞なので、レベル 2 でなく、レベル 1 で付加されなければならない。それゆえ、*standardize* は、レベル 1 での形態操作の過程の一部を構成しているものであるから、まだ派生語彙項目エントリーの資格を与えられているとは言えない。このことは、BEC との関係からも明らかである。つまり、BEC は、サイクルの終わりではなくレベルの終わりで適用されるので、*-ation* の左側の記号列は Kiparsky が与えているような内的括弧が削除された *[standardize]* ではなく、派生過程を示す内的括弧を含む *[[standard] ize]* である。もし、派生語彙項目エントリーは内的括弧を含むものではないとすれば(この点について、Kiparsky は明示的に述べていないのだが)、*[[standard] ize]* は、当然、派生語彙項目エントリーの資格を与えられないことになる。それゆえ、EC により SRR と離接的關係となる同定規則は存在しなくなるので、この場合 SRR が適用されて、入力韻律構造を変更し、(11)のような不適格な韻律構造が派生されることになる。

次の例 *parental* は、前出のものとは異なり語彙項目エントリーの資格とは無関係に、Kiparsky の分析の明らかな反例となるものである。*parental* の派生は EC により次のようになる。() は韻律外要素 (extrametrical

element) を示す)



第二サイクルで、形容詞韻律外規則 (Adjective Extrametricality Rule) が語末の音節 *-al* に適用され、これは、ESR が適用される時、考慮から除かれる。従って、ESR は *-al* の左側の記号列にのみ適用されることになる。しかし、それは、基本的語彙項目エントリーであるので、同定規則が適用され EC は ESR の適用を阻止し、不適格形 (12b) が派生されるのである。

ESR と SRR の適用の違いについて、今のところ、どのような原理から派生されるのかまったく明らかではない。それゆえ、EC によって説明しようとする Kiparsky の試みは、それなりに魅力的ではあるが、Kiparsky の主張を受け入れるとすれば、誤った韻律構造が派生されるので、それを修正するアドホックな規則が必要となり、韻脚構築の規則体系がかなり複雑なものになるということは明らかであり、改めて論証するまでもないであろう。それゆえ、Hayes の分析でも含意されているように、ESR と SRR が韻律構造を変更できるか否かについては、各々の規則に対して指定されなければならない特有の属性であると仮定した方がよいと言えよう。

2.3 阻止現象

形態論での EC の問題は、その制約があまりにも強いため実際は可能な語形成を不可能なものとして予測してしまうので、形態的現象を支配している原理であるとは言い難いということである。このような問題は、同じ情報を持つ、形態の異なる二つの接辞が関与する場合に生じる。この場合、一つの接辞が早いレベルで付加されると、それより後のレベルでなされるもう一つの接辞の付加は、EC により常に阻止されることになる。しかし、EC の予測とは反対の接辞付加の過程や両方の接辞が付加されることもある。例えば、*-ity* と *-ness* を例に取り挙げて、このことを考察する。*-ity* はレベル 1 で付加され、*-ness* はレベル 2 で付加される。それゆえ、EC は *-ity* の付加だけを予測し、*-ness* の付加を阻止する。しかし、この予測とは反対

に、-nessの付加が-ityの付加を阻止する場合がある。(*kindity/kindness, *cleverity/cleverness)。⁵ さらに、派生形態論では、特に、sanity/sanenessのような二重語(doublet)は多数存在する。それゆえ、ECは、派生形態論での一般的傾向を十分に促えているとは言えない。

上述の問題を解決するためには、ECの制約をかなり弱めるか、またECを用いず、可能な語形成を規定するための他の手段を設定しなければならないだろう。しかし、後程見るように、ECを仮定するまでもなく、LPMの理論的枠組み自体、ECで処理される、あるいは処理しきれない形態的現象をきれいに説明できる機能をもともと備えているので、仮に、ECを修正したとしても、ECの存在は、LPMの理論的枠組みではまったく余剰的なものになる。従って、LPMの枠組みから、ECを排除するとしても、特に差し障りは生じないことになる。

3. ECを仮定しないLPM理論

3.1 形態論

本節では、接辞の下位範疇化の情報とレベル順序づけの仮説(Level Ordering Hypothesis, 以下LOHと略す)によって、ECで説明されたあるいはECの問題となった形態的現象が、いかにして処理されるか見てゆくことにする。はじめに、接辞が持つ情報について触れておきたい。生成形態論のすべての文献で見られるように、どのような接辞がどのような種類の基体(base)に付加されるかという下位範疇化の情報と接辞が付加されることにより生じる出力の属性は何かといったような情報は、原理より派生されるものでなく、各々の接辞ごとに指定されなければならない。Kiparskyは、これらの情報を接辞を挿入する規則の文脈制限として取り扱っている。⁶

再び、*oxensの例を考えてみよう。Kiparskyの枠組みでは、最初に、名詞oxに、[+Plural]の素性を与えるために[] [+Noun, +Plural]に名詞oxを挿入する(この手続きに関してはKiparskyは詳述していない)。次に、レベル1のOx-規則(13)が義務的に適用され-enが付加される。

(13) Insert /en / in env. [ox ____] [+Noun, +Plural]

(14) Insert /z / in env. [N ____] [+Noun, +Plural]

where N is [+Singular]

レベル3で適用される一般的複数規則 (14) は, [+Singular]に限定されているので, *oxen* に, さらに, (14)により *-s* が付加されることはない。もし, (14)が適用されると, Kiparsky (1983) で提案されている形態論における投射の原理 (Projection Principle) により **oxens* は排除される。この原理は接辞の下位範疇化の要求は, すべてのレベルで満たさなければならないということ仮定しているものである。このように, 同じ情報を持つ接辞の積み重ねは, 下位範疇化の情報と投射の原理により排除されるので, ECを仮定したとしても余剰的なものになると言える。

次に, 阻止現象について見てゆく。この場合, 特に LOH は重要な役割を果たす。LOH がなければ, *feet* や *oxen* のような形が適格であり, **foots* や **axes* は不適格であるということは説明できない。それゆえ, LOH を仮定しない場合においてのみ, EC は効力を発揮し, 一般的複数規則が *ox* や *foot* に適用されるのを阻止し, *feet* や *oxen* だけを生成する。しかし, LPM の枠組みでは, LOH が仮定されているので EC はまったく不要である。例えば, レベル1にある *Ox*-規則は, LOH によりレベル3にある一般的複数規則より先に適用される。また *Ox*-規則は, [*ox*] [+Noun, +Plural] に義務的に適用されるので, その後レベルで, [*ox*] [+Noun, +Plural] という複数索性を含む記号列は存在しなくなり, レベル3で一般的複数規則が適用される可能性はなくなる。このように, 阻止現象も EC を仮定するまでもなく LPM の枠組みでは, 自動的に処理されるのである。

最後に, EC によって説明できなかった場合の例として取り挙げた *-ity* と *-ness* の付加過程について見てゆく。Aronoff (1976), Allen (1978) や Fabb (1984) で指定されているように, *-ity* は [+Latinate] を持つものに付加され, *-ness* は [+Latinate] を持つものにも [+Native] を持つものにも付加される。このことに基づいて, これらの接辞は, (15)の規則により挿入されると言える。

- (15) a. Insert /iti/ in env. [A _____] [+Abstract Noun]
 where A is [+Latinate]
 b. Insert /nes/ in env. [A _____] [+Abstract Noun]
 where A is [+Latinate] or [+Native]

**kindity* や **cleverity* といった不適格な形は、*-ity* の下位範疇化の情報により、投射の原理に従って除かれる。一方、*saneness / sanity* のような二重語の場合は、*sane* が [+Latinate] という素性を持っているので、*-ity* の付加も *-ness* の付加も可能となるのである。⁷

3.2 音韻論

2.1で、音韻規則を支配する原理としては、ECよりSCCの方が妥当なものであることを論じた。本節では、Mascaróなどによって与えられたSCCよりHalle & MohananのSCCの方が、語彙音韻規則を支配する原理としては、優れているということを簡単に述べたい。

これまで、SCCについて、さまざまな提案がなされてきた。例えば、Mascaróに代表されるような従来のSCCは、かなり制限が厳しく、循環規則である強勢付与規則と分節化規則(syllabification rule)は、規則の適用により派生された表示には適用できるが、そうではない表示には適用できないというやっかいな問題を含んでいた(例えば、*nightingale* などにおける語強勢の付与などは、SCCにより阻止されるのである)。しかし、Halle & Mohananによって最近提案されたSCCでは、そのような問題が生じないという点で優れている。⁸

Kiparskyに従って、Halle & Mohananは、語彙音韻規則が構造構築規則(structure-building rule)として作用する場合と構造変化規則(structure-changing rule)として作用する場合を区別している。前者の規則は、韻脚構築規則、分節化規則、基底表示でのエントリーにおける無指定の(unspecified)素性の値を指定された(specified)ものにする余剰規則である。⁹ 一方、後者の規則は、すでに構築された韻律構造や分節構造を変更し、あるいは指定された素性の値を変えるものである。規則を、このように、その作用に基づいて区別することにより、単一形態素でできた*nightingale*のような語にも、循環規則である強制付与規則や分節化規則は適用されるようになる。Halle & Mohanan (1985, p. 57)は、規則の作用のこのような特徴をSCCの中に取り入れている。

(10) SCC

循環層(レベル)で適用される規則は、それが適用されるサイクルにおいて、派生されていない環境では、構造を変えることができない。

SCC (16) によって、*nightingale* の派生がいかにして処理されるか簡単に述べたい。*nightingale* は、派生された環境とはいえませんが、この場合での韻律構築規則や分節化規則の適用は、各々韻律構造と分節構造を構築するもので、そのような構造を変更するものではないので、SCC は、これらの規則の適用を阻止しない。次に、TSR の適用は、SCC により阻止される。つまり、*nightingale* の最初の母音は、基底表示では、無指定の [0 long] ではなく指定された [+long] であるので、TSR が適用され、[+long] を [-long] に変えることは SCC によって阻止されるのである。

このように、Halle & Mohanan の SCC は、従来のものより優れているということが明らかである。

4. 終わりに

本稿の議論を要約すると、まず、音韻論について、EC だけでは SCC によって与えられる効果を派生できず、特別の手だてが必要であったし、また EC が ESR と SRR の適用の違いをも説明できるという Kiparsky の主張を受け入れるとすれば、韻脚構築の規則体系がかなり複雑なものになるという問題が生じた。それゆえ、EC を排除し、SCC を仮定する方が妥当であることを示した。

さらに、形態論については、LPM の枠組み自体が、EC で処理できるあるいは処理できない形態的現象を説明できる機能をもともと備えているので、LPM の理論的枠組み内では、EC は余剰的なものとなり、EC を排除したとしても特に差し障りは生じないということを示した。

従って、音韻論と形態論の二つの分野を支配する原理として、LPM の枠組みから、EC を排除した方が望ましいという結論が得られる。

注

- 1 Kiparsky は、英語の語彙部門に三つのレベルを認めている。

レベル 1	(i) クラス I 接辞による派生 (ii) 不規則的屈折形の派生 (iii) 母音交替, 母音変更などの派生
レベル 2	(i) クラス II 接辞による派生 (ii) 複合語形成
レベル 3	規則屈折形の派生

Mohanan (1982) では、4つの層(レベル)を認めている。層1は、クラスIの接辞付加、層2は、クラスIIの接辞付加、層3は、複合語形成、層4は屈折語尾の付加となっている。

- 2 Aronoff (1976) を参照。
- 3 例えば、*nationality* のレベル1での語彙表示は、[[*nation*] a] ity] であるが、語彙後表示は [*nationality*] となる。
- 4 同定規則自体が、かなり問題を含んでいるものであるということに関しては、Mohanan & Mohanan (1984, p. 592, fn. 30) を参照。
- 5 同様のことは、接頭辞 *in-*(レベル1: **ingrammatical*) や *un-*(レベル2: *ungrammatical*) の付加でも生じることが Sproat (1985) により指摘されている。
- 6 Lieber (1980) や Selkirk (1982) は、接辞も語彙項目エントリーを持つとし、これらの情報をその中に記載している。
- 7 派生接辞の付加は、一般に、随意的であり、投射の原理により制約されて、不可能な語形成は除かれる。屈折形態論においては、派生形態論と比べると二重語はかなり少ない。それゆえ、屈折形態論の規則は、義務的であるといえる。*kneeled* / *knelt*, *dreamed* / *dreamt* のような二重語については、Kiparsky も述べているように、有標的な場合であり、このような場合に限って、レベル1の規則を随意的とすることにより説明される。
- 8 Halle & Mohanan の SCC は、従来の SCC の問題の一つを解決しているわけであるが、Halle & Mohanan を含むすべての SCC は、別のやっかいな問題をなお含んでいる。それは、構造構築規則の適用は、派生された環境を作ることになり、構造変化規則の適用を可能にするということである。

Nightingale を例にとると、構造構築規則の適用により、派生された環境となり、TSR が適用されてしまうのである。Kiparsky (1985) は、構造構築規則を派生された環境を作り出す規則のクラスから除くように SCC を修正している。しかし、Kaisse & Shaw (1985) は、クラマス語 (Klamath) における循環規則は、分節化規則が派生された環境を作り出すということに基づいて適用されるということを指摘しており、SCC についてのこの問題は、今後さらに検討されなければならないといえよう。

9 無指定の基底表示の理論、つまり、過小指定 (Underspecification) の理論に関しては、Archangeli (1983), Pulleyblank (1983) を参照。

参考文献

- Allen, M. (1987) *Morphological Investigations*. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Aronoff, M. (1976) *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Archangeli, D. (1984) *Underspecification in Yawelmani Phonology and Morphology*. Doctoral dissertation, MIT.
- Fabb, N. (1984) *Syntactic Affixation*. Doctoral dissertation, MIT.
- Halle, M. and K. P. Mohanan (1985) "Segmental phonology of modern English," *Linguistic Inquiry* 16, 57-116.
- Hayes, B. (1980) *A Metrical Theory of Stress Rules*. Doctoral dissertation, MIT.
- Hayes, B. (1982) "Extrametricity and English stress," *Linguistic Inquiry* 13, 227-276.
- Kaisse, E. and Shaw, P. (1985) "On the theory of lexical phonology," *Phonology Yearbook* 2, 1-30.
- Kiparsky, P. (1982a) "From cyclic phonology to lexical phonology," in H. G. Hulst, and N. Smith (eds), *The Structure of Phonological Representations*, vol. 1, Foris, Dordrecht, 131-175.
- Kiparsky, P. (1982b) "Lexical morphology and phonology," in I. S. Yang (ed), *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul: Hanshin, 3-91.
- Kiparsky, P. (1983) "Word formation and the lexicon," in F. Ingemann (ed.) *Proceedings of the 1982 Mid-America Linguistics Conference*. Lawrence, Kansas: University of Kansas, 3-29.
- Kiparsky, P. (1985) "Some consequences of Lexical Phonology," *Phonology Yearbook* 2, 85-138.
- Mascaró, J. (1976) *Catalan Phonology and the Phonological Cycle*. Doctoral disserta-

- tion, MIT, distributed by Indiana University Linguistics Club.
- Lieber, R. (1980) *On the Organization of the Lexicon*. Doctoral dissertation, MIT.
- Mohanan, K. P. (1982) *Lexical Phonology*. Doctoral dissertation, MIT.
- Mohanan, K. P and T. Mohanan (1984) "Lexical Phonology of the consonant system in Malayalam," *Linguistic Inquiry* 15, 575-602.
- Pulleyblank, D. (1983) *Tone in Lexical Phonology*. Doctoral dissertation, MIT.
- Selkirk, E. (1982) *The Syntax of Words*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Sproat, R. W. (1985) *On Deriving the Lexicon*. Doctoral dissertation, MIT.

Markedness and Double Object Constructions*

Minoru Fukuda

SYNOPSIS

This paper deals with a problem with the theory of (abstract) Case within the framework of the Government and Binding theory of generative grammar. The problem concerns Case-assignment to the direct object (DO) in the double object construction (DOC).

It is argued that the DO in the DOC can receive Case from the verb by means of a marked rule of Exceptional Case-Marking (ECM), though the Adjacency Condition (AC) seems to block Case-assignment. The theory of markedness ensures that such a marked rule is derived from an unmarked condition, i. e. the AC, by relaxing it. It is pointed out that three idiosyncratic properties of the DOC are ascribed to the marked nature of ECM. Consequently, our proposal enables us to dispense with what is called "Dative Movement" and, in the light of explanatory adequacy, contributes to the development of the theory of grammar.

Section 1. A Certain Problem with Case Theory

In recent years, the study of the double object constructions (DOCs) in view of the theory of (abstract) Case has enjoyed a lot of attention within the Government and Binding theory of generative grammar.¹ This paper will consider a problem which has become very familiar in the literature dealing with the DOCs in terms of Case theory. I expect, however, that an explanation must begin with the recognition of some

of the principles of Case theory.

Following Chomsky (1981a) and Stowell (1981), we will assume that the standard version of Case theory contains the principles illustrated in (1).²

- (1) a. Case-assignment is sensitive to government.
- b. Two types of Case : structural Case and inherent Case.
- c. Case-assigners are minimal projections and V'.
- d. Case-assigners are [-N] categories, i. e. V and P, and [+INFL] .
- e. Case Resistance Principle (CRP) : Case-assigners are not Case-assignees.
- f. Adjacency Condition (AC)
- g. Exceptional Case-Marking (ECM) : CP (=S') deletion by *believe* type verbs.
- h. Absorption of a Case-assigning feature [-N] by a passive morpheme.
- i. (i) [+INFL] is an assigner of Nominative Case.
- (ii) V is an assigner of Objective Case.
- (iii) P is an assigner of Oblique Case.
- (iv) N' is an assigner of Genitive Case.
- (v) [-N] governor with some properties is an assigner of inherent Case.

Now, let us further elaborate the system (1) and suggest that the principles of Case theory can be divided into two types : one specifies the properties of Case-assigners and Case-assignees, while the other specifies the way of Case-assignment and the structural environment in which Case-assignment holds. Let us call the former S_(ub)C(omponent) I and the latter S_(ub)C(omponent)II.³

(2) SC I

- a. Two types of Case : structural Case and inherent Case.
- b. Case-assigners are minimal projections and V'.
- c. Case-assigners are [-N] categories and [+INFL] .

- d. CRP
- e. Absorption of a Case-assigning feature [-N] by a passive morpheme.
- f. (i) [+INFL] is an assigner of Nominative Case.

⋮

SC II

- a. Case-assignment is sensitive to government.
- b. AC
- c. ECM

Case theory, which is one of the modules of grammar, has been further factored out into two modules. The system (1) consists of heterogeneous principles of Case theory. The two modules in (2) embody a clear distinction between them.

Turning to SC II, let us sketch the three principles one by one.

First, we will follow Aoun and Sportiche (1983) and adopt their definition of government :⁴

(3) Government :

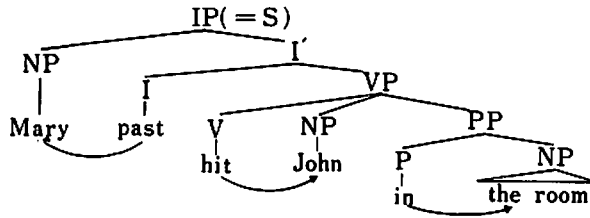
X governs Y iff

- (i) $X = X^{\circ}$ and $Y = Y'' (=YP)$, and
- (ii) every maximal projection that dominates X also dominates Y, and every maximal projection that dominates Y also dominates X.

Thus, according to SC IIa, Case-assignment in such an example as (4) can be shown as in (5), where an arrow indicates Case-assignment⁵ :

(4) Mary hit John in the room.

(5)



Second, following the spirit of Stowell (1981), we stipulate the Adjacency Condition (AC), which distinguishes (7) from (8), as follows:

(6) A Case-assigner and a Case-assignee must be linearly adjacent.

(7) John [_v told] [_{NP} the boy] [_{PP} [_P about] [_{NP} Mary]]

(8) *John [_v told] [_{PP} [_P about] [_{NP} Mary]] [_{NP} the boy]

Third, consider the nature of Exceptional Case-Marking (ECM). It is well known that the *believe* type verbs trigger the deletion of a node CP (=S') to make it possible for the verb to govern the subject position of its complement. Thus, we obtain the contrast between (9a) and (9b):

(9) a. I [_v believe] [_{IP} [the secretary] to have made a mistake]

(cf. I believe the secretary to have made a mistake.)

b. *I [_v believe] [_{IP} PRO to have made a mistake]

(cf. *I believe to have made a mistake.)

Note that IP (=S) is not a barrier to government. In (9b), PRO is governed and assigned Case, violating the theorem that requires that PRO be ungoverned. It is worth noting here that the property of CP deletion is not found in French counterparts, as discussed in Chomsky (1981a, 1986a). The difference between (9b) and (10) demonstrates this.

(10) Je crois avoir fait une erreur.

'I believe to have made a mistake'

(cf. Je [_v crois] [_{CP} [_{IP} PRO avoir fait une erreur]])

Turning now to the main topic, let us consider Case-assignment in the DOC.

(11) John gave Mary a book.

According to the AC, such a sentence as (11) should be ungrammatical, since the direct object (DO) *a book* is not adjacent to the verb *gave*, though the indirect object (IO) *Mary* is indeed adjacent to it. The sentence (11) is, however, a natural English sentence, contrary to what the AC predicts. The grammaticality of (11) implies that both objects are in fact marked for Case. Thus, the standard Case theory is in a dilemma: the DO actually receives Case while the AC predicts that it should not do so.

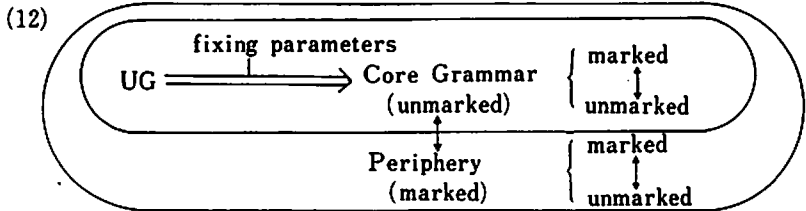
There seem to be two ways to solve this problem: one resorts to a special and subsidiary treatment of a Case-assigner to the DO (in terms of SC I), the other resorts to some revision of Case-assignment (in terms of SC II). This paper will explore the latter way to solve the problem by appealing to the theory of markedness.

Section 2. The Theory of Markedness

Let us summarize the current proposal concerning the theory of markedness in Chomsky (1981a, b, 1986a), Koster (1978a), and Lasnik and Freidin (1981).

The theory of markedness makes a distinction between the core and the periphery of grammar. Core grammar is the optimally accessible, i. e. learnable, "unmarked" part of language and is determined by fixing certain parameters of Universal Grammar, i. e. a genetic endowment. Thus, as Koster (1978a) notes, core grammar is responsible for the most rigid part of language, and its rules and conditions are either invariant across languages, or fall within a very limited range. On the other hand, "marked" phenomena, which are generated by noncore or peripheral grammar, are those which go against the general tendencies (and are, hence, exceptional in some way).⁶

It is worth noticing that the distinction between unmarkedness and markedness can be found not only between the core and the periphery of grammar but also within each of them, as noted by Oshima (1986). (12) demonstrates the idealization discussed above :



One of the tasks of the theory of markedness is to determine the proper relationship between an unmarked part and a marked part, which is represented as \updownarrow in (12). Concerning this matter, Chomsky (1981b : 126-127) states that :

(13) ... outside the domain of core grammar we do not expect to discover chaos. Marked structures have to be learned on the basis of slender evidence too, so there should be further structure to the system outside of core grammar. We might expect that the structure of these further systems relates to the theory of core grammar by such devices as relaxing certain conditions of core grammar, processes of analogy in the sense to be made precise, and so on, though there will presumably be independent structure as well ...

So, there are at least three ways to characterize the relationship between core grammar and periphery according to Chomsky (1981b).

- (14) a. Relaxing certain conditions of core grammar
 b. Analogy⁷
 c. Completely independent structure⁸

It follows that the marked rules should show the following tendencies⁹ :

- (15) a. For the language learner, marked rules are relatively hard to acquire, because he / she owes them to no innate help to learn the marked rules.
- b. Marked rules are subject to lexical idiosyncrasies.
- c. Marked rules are responsible for variance in judgement about the sentences they produce.
- d. Marked rules are less general across languages.

Note that marked rules do not have to show all of these tendencies. (cf. Yagi (1984))

The standard Case theory represented in (2) seems to belong to the modules of the core grammar (of English). We will argue that the problem with the AC pointed out in section 1 can be solved by means of the theory of markedness.

Section 3. Markedness of DOC

Several idiosyncratic properties of the DOC have been independently observed in the literature dealing with the DOC, but there has been little insight into the source from which such properties are derived.

This section concentrates on three idiosyncratic, i. e. marked, properties of the DOC, each of which accords with (15a-c).

First, Bolinger (1975 : 7-8) reports that :

- (16) when four-years-olds are given a sentence like *I gave the dog the bone* they will repeat it and understand it, but if they are asked to report the same event themselves they will say *I gave the bone to the dog*. The construction without *to* is less general.

This fact implies that it is more difficult for children to acquire the DOC than the indirect object construction (IOC) such as *I gave the bone to the dog*, where the IO follows a preposition. Note that Case-assignment to the objects in the IOC in fact obeys the AC, as (17) shows :

- (17) I [v gave] [NP the bone] [PP [P to] [NP the dog]]

According to (15a), we may expect that the principles which contribute to the existence of the DOC are characterized as marked. In other words, Case is assigned to the DO by a certain marked Case-assignment rule in the DOC.

Second, it has been observed that the verbs which select double objects are strictly restricted. This is why the condition on the structural description of what is traditionally called "Dative Movement" always contains the following notation :

- (18) $X - V_{\alpha} - np - (Prt) - NP - [_{PP} \text{ to } - NP] - Y \Rightarrow$
 1 - 2 - 7 - 4 - 5 - \varnothing - \varnothing - 8

OPTIONAL

In this rule V_{α} denotes the class of verbs that governs Dative Movement.¹⁰

If every verb could appear in the DOC, for example, the following ungrammatical sentence would be generated :

- (19) *I reported the police a suspicious person.
 (cf. I reported a suspicious person to the police.)

The fact that the class of the verbs which can appear in the DOC is narrowly restricted indicates that the principles which generate the DOC are to be characterized as marked, as (15b) attests.¹¹

Third, I have investigated the fact that some speakers do not regard the DOC like (20) as fully acceptable, though they regard the IOC like (21) as fully acceptable :¹²

- (20) John handed the class the papers.
 (21) John handed the papers to the class.

Note that in (21) Case-assignment to objects obeys the AC. As (15c) ensures, the observation above indicates that the DOC is produced by a certain marked rule.

We have demonstrated three marked tendencies of the DOC in

English, each of which suggests that the existence of the DOC is due to a certain marked rule of the grammar.

Section 4. Case-Assignment in DOC

A significant implication of the observation given in the preceding section is that the DOC owes its existence to a certain marked rule of Case theory. It follows that it is natural to appeal to a marked rule to account for Case-assignment to the DO in the DOC. The marked rule for the DOC which we want to propose is a kind of ECM.

Now, let us assume two types of ECM: one deletes a node CP (=S'), the other makes it possible for the DO to receive Case from the verb without any violation of the AC.¹³

(22) ECM (I): CP deletion by the *believe* type verbs.

ECM (II): in the configuration, ... [V NP₁ NP₂], ..., if NP₁ is assigned Case by the verb, it is invisible for the AC, so that NP₂ can receive Case from the verb.^{14,15}

As noted earlier, the AC is an unmarked condition of the grammar of English.¹⁶ Hence, the theory of markedness ensures that such a marked rule as ECM(II) is derived from the AC by relaxing such an unmarked condition as the AC, as stated in (14a).

Before presenting a concrete illustration of Case-assignment in the DOC, let us follow Chomsky (1986a) and assume that :

(23) a. Every lexical category (i. e. N, V, A, P) assigns Case.

b. (i) Structural Case (i. e. Nominative and Accusative) is assigned by [+INFL] and V and realized at S-structure.

(ii) Inherent Case (i. e. Genitive and Oblique) is assigned by N, A, and P at D-structure and realized at S-structure.

c. The direction of Case-assignment for [\pm N, \pm V] element is uniform.

Further, we assume that the single Case principle which requires [-N]

(28) *John hit Mary the dog.

Such a sentence as (28), however, is ruled out by the θ -criterion because the verb *hit* θ -marks one argument, so that either *Mary* or *the dog* violates the θ -criterion at LF.

Let us closely look at the interaction of ECM (II) with the AC. The two modules interact to yield an interesting consequence. By way of illustration, let us examine the fact that in (29) (a) is significantly worse than (b):

- (29) a. **Tom gave immediately Mary a book.
 b. *Tom gave Mary immediately a book.

In (a), both objects violate the Visibility Condition (or the θ -criterion), since the adverb prevents the IO *Mary* from receiving Case from the verb to trigger ECM (II). In (b), on the other hand, the IO successfully receives Case from the verb according to the AC. Since ECM (II) only ensures that a Case-marked NP is invisible for the AC, the adverb is still visible for the AC. Therefore, the DO *a book* fails to receive Case, violating the Visibility Condition. Now, we can easily ascribe the lower grammaticality of (29a) to the fact that both objects violate the Visibility Condition, though in (29b) one object violates it.²⁰

We noted in section 1 that ECM (I), i.e. CP deletion, may be parameterized to account for a certain difference between English and French. Assume further that ECM (II) is also parameterized. The following contrast observed by Kayne (1984) between English and French is then attributed to the fact that ECM (II) is available in English while it is not in French.

- (30) a. John gave Mary a book.
 b. They sent John a registered letter.
- (31) a. *Jean a donné Marie un livre.
 b. *Ils ont envoyé Jean une lettre recommandée.

In French, the lack of ECM (II) causes the Visibility Condition violation

of the DO, so that DOCs are not found in French, although the two languages are similar as far as the IOCs, which obey the AC, are concerned.

- (32) a. John gave a book to Mary.
 b. They sent a registered letter to John.
- (33) a. Jean a donné un livre à Marie.
 'John gave a book to Mary'
 b. Ils ont envoyé une lettre recommandée à Jean.
 'They sent a registered letter to John'

Returning to the main theme, the three marked characters of the DOC reviewed in section 3 are natural consequences of the marked character of ECM (II). They are exactly consistent with what the theory of markedness predicts.²¹

We have answered the fundamental question addressed in section 1: what mechanisms contribute to the existence of the DOC in English? The answer is that principles of Case theory, especially the AC and ECM (II), and the theory of markedness are the contributing factors.

Section 5. Conclusion

This paper is an attempt to apply the theory of markedness to the theory of (abstract) Case so as to solve a certain problem with the AC.

In order to account for Case-assignment to the DO in the DOC, we proposed a marked rule ECM (II). The theory of markedness ensures that such a marked rule is derived by relaxing an unmarked condition, i. e. the AC. Three apparent idiosyncratic properties of the DOC can be tracked to the marked nature of ECM (II). A certain difference between English and French can be accounted for by the assumption that ECM (II) is parameterized as well as ECM (I), i. e. CP deletion.

Our argument has implicitly suggested that the DOC and the IOC are not transformationally related, but that they are base-generated. It follows that such a rule as Dative Movement can be dispensed with.

A reduction of transformational mechanisms is always welcome from the point of view of explanatory adequacy. The greater descriptive latitude allowed by the theory of grammar, the further away we move from the goal of explanatory adequacy. From this point, a radical impoverishment of such a rule as Dative Movement leads to the progress of the theory of grammar. However, it goes without saying that further research, examining a richer and broader data base, is undoubtedly needed to draw finer conclusions concerning the DOCs discussed in this paper.

Notes

*This is based on the section 1 and 2 of a paper read at the Second General Meeting of Konan English Society held at Konan University on May 31, 1986. The title of the original paper is "Double Object Constructions and Case Theory." I am grateful to the audience for their comments on the paper. I wish to thank Professor Oshima at Kochi University, whose stimulating comments helped to improve the idea of ECM (II), and Mr. David Ewick, who acted as an informant and checked my English. Naturally, they are not responsible for the content of this paper.

- 1 For the current studies on the DOC, see Chomsky (1981a), Czepluch (1982), Fukuda (1986), Kayne (1984), Stowell (1981), and Whitney (1983). I will not survey their analyses or problems in this paper.
- 2 Note that Case Filter is omitted from (1) since it could be reduced to the Visibility Condition (on θ -marking). Cf. Chomsky (1981a, 1986a).
 - (i) Case Filter

*NP if NP has phonetic content and no Case. (Chomsky (1981a : 49))
 - (ii) Visibility Condition

An element is visible for θ -marking only if it is assigned Case.
(Chomsky (1986a : 94))
- 3 Several consequences follow from this assumption concerning the interaction problems between the DOCs and movement rules. See Fukuda (1986), for further discussion.
- 4 Chomsky (1986b) and May (1985) propose slightly different definitions of government. Nothing, however, hinges on their definitions.

- 5 We follow the phrase structure scheme proposed in Chomsky (1986a, b).
- 6 The theory of markedness can be seen as an idealization which conflates two assumptions: one is that not all date are created equal, the other is that not all rules are created equal.
- 7 (14b) is similar to what Kajita (1977) calls "Dynamic Model."
- 8 A rule of *to*-deletion is an instance of (14c). See Jackendoff and Culicover (1971), Koster (1978b), and Fukuda (1986) for discussion of this rule.
- 9 Cf. Chomsky (1981a, b), Koster (1978a), and Yagi (1984).
- 10 (18) is a version given in Jackendoff (1977: 68). However, we do not assume the existence of Dative Movement, but assume it only for the expository purpose.
- 11 According to Stowell (1981), the class of the verbs involved is roughly restricted to the Native stem class, i. e. all either monosyllabic or else disyllabic with first-syllable stress.
- 12 I had the sentence (20) checked by twelve native speakers of English. Five of them did not consider it fully acceptable.
- 13 Fabb (1984) independently suggests a similar condition for the DOC.
- 14 Note that we slightly differ in the recent usage of the terms like "visible" and "invisible." Informally, an element is visible for some rule iff it blocks the application of the rule. In other words, a visible element is an obstacle to the application of a rule. By contrast, an invisible element neither blocks nor is an obstacle to the application of the rule.
- 15 Oshima (personal communication) suggests a revision of ECM (II) to me on the assumption that Dative Case is a kind of inherent Case in the sense of Chomsky (1986a):

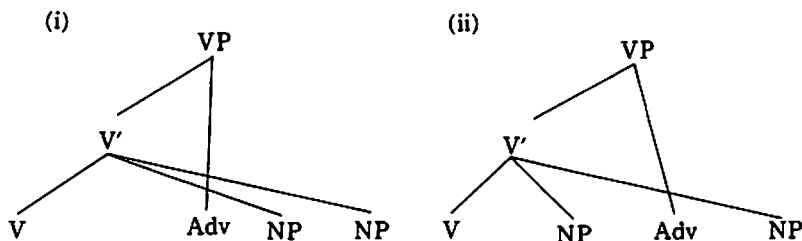
- (i) In the configuration, . . . [V NP₁ NP₂] . . . , if NP₁ is assigned inherent Case (i. e. non-structural Case) by the verb, it is invisible for the AC, so that NP₂ can receive structural Case from the verb.

Note that we assume that both objects in the DOC receive structural Case from the verb. We will not compare the consequences of ECM (II) with those of (i) here.

- 16 Platzack (1985: 33) assumes that Universal Grammar includes the AC on Case-assignment. Contrary, Haider (1985) claims that the AC is not available in German. A significant implication of them is that the AC may be parameterized. See Fukuda (1986) for further discussion on this line.
- 17 The single Case principle is proposed by Czepluch (1982).
- 18 Stowell (1981) argues that the IO in the DOC bears a θ -role of possessor rather

than a θ -role of goal. We ignore the specific class of θ -role here, just focusing on whether an argument is θ -marked or not.

- 19 At D-structure, all arguments, i. e. NPs and clauses, must appear in θ -positions. See Chomsky (1981a, 1986a).
- 20 One might argue that the lower grammaticality of (29a) is due to the violation of the Crossing Branch Constraint (cf. Radford (1981)), with the structure (i) for (29a) and the structure (ii) for (29b) :



It could be argued that (29a) is worse than (29b) since there are two crossovers in (i) whereas only one in (ii). However, this is nothing but another look at the same fact. Nothing essential hinges on such an argumentation.

- 21 See (15a-c).

References

- Aoun, J. and D. Sportiche (1983) "On the Formal Theory of Government." *The Linguistic Review* 2, 211-236.
- Belletti *et al.*(eds.) (1981) *Theory of Markedness in Generative Grammar : Proceedings of the 1979 GLOW Conference*. Scuola Normale Superiore Pisa.
- Bolinger, D. (1975) *Aspects of Language*. 2nd ed. Harcourt Brace Jovanovich, New York.
- Chomsky, N. (1981a) *Lectures on Government and Binding*. Foris, Dordrecht.
- . (1981b) "Markedness and Core Grammar." in Belletti *et al.*(eds.)
- . (1986a) *Knowledge of Language*. Praeger, New York.
- . (1986b) *Barriers*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Czepluch, H. (1982) "Case Theory and the Dative Construction." *The Linguistic Review* 2, 1-38.
- Fabb, N. (1984) "Syntactic Affixation." Ph. D. dissertation, MIT.
- Fukuda, M. (1986) "Movements from Double Object Constructions." MS. Konan

University.

- Haider, H. (1985) "V-Second in German." in Haider and Prinzhorn (eds.).
 ———. and M. Prinzhorn (eds.) (1985) *Verb Second Phenomena in Germanic Languages*. Foris, Dordrecht.
- Jackendoff, R. (1977) *X Syntax*. MIT Press, Cambridge, Mass.
 ———. and P. Culicover (1971), "A Reconsideration of Dative Movements." *Foundations of Language* 7, 397-412.
- Kajita, M. (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax." *Studies in English Linguistics* 5, 44-76.
- Kayne, R. (1984) *Connectedness and Binary Branching*. Foris, Dordrecht.
- Koster, J. (1978a) "Conditions, Empty Nodes, and Markedness." *Linguistic Inquiry* 9, 551-593.
 ———. (1978b) *Locality Principles in Syntax*. Foris, Dordrecht.
- Lasnik, H. and R. Freidin (1981) "Core Grammar, Case Theory, and Markedness." in Belletti *et al.*(eds.).
- May, R. (1985) *Logical Form*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Oshima, S. (1986) An Intensive Course on the Government and Binding theory. June 10-14, July 11-15, at Konan University.
- Platzack, C. (1985) "The Position of the Finite Verb in Swedish." in Haider and Prinzhorn (eds.).
- Radford, A. (1981) *Transformational Syntax*. Cambridge University Press.
- Stowell, T. A. (1981) "Origins of Phrase Structure." Ph. D. dissertation, MIT.
- Whitney, R. (1983) "The Place of Dative Movement in a Generative Theory." *Linguistic Analysis* 12, 315-322.
- Yagi, T. (八木孝夫) (1984), "Togoron no yuhyosei-riron." (「統語論の有標性理論」) *Gengo* (「言語」) 13. 1. 238-48.

甲南英文学会規約

第1条 名称 本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英文学科に置く。

第2条 目的 本会は、会員のイギリス文学、^{その}アメリカ文学、英語学の研究を促進し、会員間の親睦を計ることを目的とする。

第3条 事業 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。

1. 研究発表会および講演会
2. 機関誌「甲南英文学」の発行
3. 役員会が必要とした事業^{その他の}

第4条 組織 本会は、つぎの会員を以て組織する。

1. 一般会員
 - イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および、博士課程、博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
 - ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻）および甲南大学文学部英文学科の専任教員
 - ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
2. 名誉会員 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻）を担当して、退職した者
3. 賛助会員

第5条 役員 本会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、評議員若干名、会計2名、会計監査2名、編集委員長1名、幹事2名

2. 役員任期は、それぞれ、2年とし、重任は妨げない。
3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によって、これを決定する。
4. 評議員は、第4条第1項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
5. 会計、会計監査、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
8. 評議員は、会員の意志を代表する。

9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
12. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員について年間6,000円とする。

第7条 総会 総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数以上を以て成立し、その決議には出席者の過半数以上の賛成を要する。
3. 規約の改訂は、総会出席者の2/3以上の賛成を要する。

第8条 役員会 第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 編集委員会 第3条に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学、アメリカ文学、英語学各2名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第10条 顧問 本会に顧問を置くことができる。

→

本規定は、昭和59年12月9日より実施する。

「甲南英文学」投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は3部（コピー可）提出し、和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシス3部を添付する。ただし、シノプシスはA4版タイプ用紙65ストローク×15行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
 - イ. 和文：横書A4版400字詰め原稿用紙30枚程度
 - ロ. 和文：ワードプロセッサまたはタイプライターでA4版15枚程度（1枚40字×20行）
 - ハ. 英文：タイプライター（ダブルスペース）でA4版25枚程度（1枚65ストローク×25行）
4. 書式上の注意
 - イ. 注は原稿の末尾に付ける。
 - ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
 - ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
 - ニ. その他の書式については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*The MLA Style Sheet*（邦訳『MLA 英語論文の手引』（北星堂））に、英語学の場合、*Linguistic Inquiry Style Sheet (Linguistic Inquiry vol.1)* に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は、必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正加筆は認めない。
6. 締切は9月末日とする。
7. 投稿者は、投稿料を負担する場合もある。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨をA4版400字詰め原稿用紙3枚（英文の場合は、A4版タイプ用紙ダブルスペースで2枚）程度にまとめて、3部（コピー可）提出すること。
3. 査閲および研究発表の割りふりは、「甲南英文学」編集委員会が行い、査閲結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、一人30分以内（質疑応答は10分）とする。

甲 南 英 文 学

No. 2

昭和62年5月10日 印刷

—非売品—

昭和62年5月20日 発行

編集兼発行者

甲 南 英 文 学 会

〒658 神戸市東灘区岡本8-9-1

甲南大学文学部英文学科気付

印刷所

大村印刷株式会社

〒747 山口県防府市大字仁井令1505

電話 防府 (0835) 22-2555
